

## 教育開発支援機構

## 教育開発・学習支援センター

## I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

## 【2019年度大学評価結果総評】(参考)

## (FD 推進センター)

FD 推進センターでは 2019 年度の年度目標の中でも、教育開発支援機構「教育支援・学習支援に係る組織の在り方懇談会」での検討を重点目標としている。FD 推進センターの業務範囲の拡大に伴い教育支援関連業務の一部を学習環境支援センターが担うようになったために、両センターが必要な情報にアクセスできず、ニーズにあった支援策を企画しづらくなっているという問題が顕在化し、上記懇談会で教育・学習支援の包括的な組織体の可能性について検討を進め、最終的には新体制案を教育開発支援機構企画委員会および学部長会議に上程することが目標とされている。本学における教育・学習支援をより効果的に機能させることは、学生の学びの質に直結する重要な課題であり、重点目標として妥当であると考えられる。11 項目に重点的に取り組むという年度目標全体も、現状と課題を踏まえて適切に設定されていると評価できる。ただし、引き続き、「学生による授業改善アンケート」結果の活用とともに、より高い回答率を目指す努力も期待したい。

## (学習環境支援センター)

学習環境支援センターでは、市ヶ谷キャンパスの建て替え工事に伴う影響を最小限にすることは大きな課題であり、配慮の行き届いた作業を完成年度まで続けてもらいたい。ピアネットの組織的・有機的な運営、およびその活動成果の測定も重要である。また、大人数授業における学生の授業サポーター（ないし学習サポーター）制度の設置も、学生の学習支援のために有用と考えられ、今後の検討・実現に期待したい。

## 【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

## (FD 推進センター)

教育開発支援機構「教育支援・学習支援に係る組織の在り方懇談会」を中心とした議論を経て、FD 推進センター長と学習環境支援センター長から提案された教育開発支援機構内の改組（FD 推進センターと学習環境支援センターを統合した教育開発・学習支援センターの設置）を第 7 回教育開発支援機構企画委員会（12/19）で承認した。その後、2019 年度第 16 回学部長会議（1/16）で上程された改組が承認され、2020 年度より新しい体制として教育開発・学習支援センターが設置された。

2019 年度の 11 重点項目のうち、10 項目については概ね達成し、教育・学習支援をより効果的に機能させ、学びの質向上を促進させた。一方、達成が不十分だった「新 GPA 制度導入に伴う成績評価のあり方に関する検討」は引き続き、今後全学的な問題提起を目指している。「学生による授業改善アンケート」結果の活用については、引き続きマクロ・ミドル・ミクロレベル別に回答率や自由記述も含め検討している。

## (学習環境支援センター)

学習環境支援センター運営委員会において、市ヶ谷キャンパス 55・58 年館建替工事中の歩行者動線についてシミュレーションなどから繰り返し検討を行い、移動者数が多いと想定される時限の間の休み時間を 2019 年度に限り延長することを実現した。また、これらについて周知徹底を HP や「コンパス」で行った。

ピアネット運営委員会において、積極的なユニット間の情報やアイデアの交換を検討し、学生スタッフ合同研修会でユニット間の混合メンバーによるグループワークなどを実施することで交流を深めた。55・58 フェアウェル Days ではユニットを横断した教職員・学生による共同出展を行った。

大学教育の充実を学生とともに図る目的で 2019 年 4 月より改定「学生アシスタント制度に関する規程」が施行した。この制度にある「授業支援アシスタント」と「ラーニング・サポーター」を、大人数授業を含めた学びの質向上への効果的活用を引き続き検討している。

## 【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

2020 年度より FD 推進センターと学習環境支援センターが正式に教育開発・学習支援センターとして統合されることになったが、これまで両組織とも重要な役割を担ってきただけに、新体制のもとでも教育・学習支援の包括的な組織として機能されることを期待したい。

FD 推進センターは、2019 年度に 11 の年度目標を掲げ、上記の機構内改組、ミドル・レベルでの FD 活動の支援、授業改善アンケートの自由記述の全学的フィードバックなど 10 項目が概ね達成されたことは評価できる。なお、達成が不十分であった「新 GPA 制度導入に伴う成績評価のあり方に関する検討」および「学生による授業改善アンケート」結果の活用については、引き続き検討され、その成果に期待したい。

学習環境支援センターでは、市ヶ谷キャンパス建て替え工事に伴う導線の検討が大きな課題であったが、2019 年度に限っ

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

での休み時間延長やその周知徹底は有効な手段であり、評価できる。また、ピアネット運営委員会における積極的な情報交換を通じて、学生スタッフ合同研修会におけるグループワークの実施や教職員・学生による共同出展が実現したことは高く評価できる。「学生アシスタント制度に関する規程」の施行に伴う、「授業支援アシスタント」や「ラーニング・サポーター」の効果的活用について、今後の成果が期待される。

## II 自己点検・評価

### 1 教員・教員組織

#### 【2020年5月時点の点検・評価】

##### (1) 点検・評価項目における現状

1.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①教員の質の維持・向上に取り組んでいますか。

S  A  B

※教員の質の維持・向上のためにどのような取り組みが行われているか概要を記入。

教育および学びの質の向上を目指し、(1)全学的な教育支援施策の企画と(2)FD活動の推進および各教学組織におけるFD活動の支援を通じた教員の質の維持・向上の現状を以下に示した。

##### (1)全学的な教育支援施策の企画

###### (1-1)教育開発・学習支援センターの設置

高い実効性を図る2019年度からのFD推進センター内改組(3ユニット体制)での活動から、特に学生の学習支援の観点から議論を重ね、2020年度から教育開発支援機構内にFD推進センターと学習環境支援センターを統合した教育開発・学習支援センターを設置した。新センター設置に伴い、センターが関与する学習環境改善検討委員会(新設)、学習ステーション運営委員会、ピアネット運営委員会、学習支援システム運営委員会の規程を整えている。

###### (1-2)FD推進センターが手がけていた継続業務の見直しおよび学内関連組織との連携

FD推進センターが学習環境支援センターと連携して2019年度にLステゼミを開催し、その実績は学習サポートユニットに引き継いでいる。2019年度FD推進センターが手がけていた大学評価室のIR担当者と連携したDP別分析や新入生アンケートや卒業生アンケートの活用の実績は、データ活用推進ユニットに引き継いでいる。

###### (1-3)「FD推進センターにおける業務運用」をベースとした新しい業務運営

「FD推進センターにおける業務運用」を改修した「教育開発・学習支援センター業務運用」を新センターで引き継いでいる。

##### (2)FD活動の推進および各教学組織におけるFD活動の支援

###### (2-1)教育への支援

FD推進センターから正課学習を支援する次の活動を引き継いでいる。センター長による「新任教員研修会での参加型FD講演」、100分授業の工夫を促す「教員ガイド」、アカデミック・アドバイザー(英語ネイティブ講師)による「アカデミック・サポート」、2020年度よりリニューアルした「学習支援システム」、筆記テキストを電子化する「授業支援ボックス」、「学生による授業モニター」、「アクティブラーニングセット」の提供、2020年度より新しいWebシステムで実施する「学生による授業改善アンケート」、HPに公開する「ゼミ活動等を対象とした学生向けループブック」、剽窃ソフト「Turnitin」など。このうち、「学生による授業改善アンケート」については自由記述分析の全学フィードバック、他アンケートとの連携の模索、ミドル・レベル(学部・学科単位)へ報告するなど新しい活用を実施している。また、新GPA制度導入に伴う成績評価のあり方を継続して検討する。

###### (2-2)学習への支援

FD推進センターと学習環境支援センターから主に正課学習を支援する次の3活動を引き継いでいる。「学習支援ハンドブック」の発行、学習ステーション主催の「Lステゼミ」、「T・Aハンドブック」。「学習支援ハンドブック」を活用した「Lステゼミ」を開催するなど、これまでのリソースを有機的に連携する取り組みも実施している。

###### (2-3)その他の支援

FD推進センターから次の4活動を引き継いでいる。「FDセミナー」「FDワークショップ」「学生が選ぶベストティーチャー賞」「FD川柳」。新たに策定した「広報方針」に基づき、「FD学生の声コンクール」も含め、効果的な広報活動を模索する予定である。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

センター内はFD推進センター3ユニットを継承する「教育サポートユニット」「学習サポートユニット」「データ活用推進ユニット」体制で、定期的にリーダー会議を中心にセンター全体として実効性がある全学的な支援活動の提案・企画・実施・検証する運用を行なっている。

【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等

- ・2019年度第16回学部長会議 資料9「教育開発・学習支援センターの設置（FD推進センターと学習環境支援センターの統合）及び関連規程の制定・廃止・改正について」
- ・教育開発・学習支援センター規程
- ・学習環境改善検討委員会規程
- ・学習ステーション規程
- ・授業支援システム運営委員会規定
- ・法政大学ピアネット規程
- ・2019年度第9回ユニット・リーダー会議 資料2「2019年度 教育開発支援機構 FD推進センター活動報告」
- ・2019年度第9回ユニット・リーダー会議 資料3「教育開発・学習支援センターにおける業務運用」

## (2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・センターの活動について、教育開発支援機構企画委員会にて報告・チェックの機会を有し、さらに学部長会議でも報告する機会が与えられていることから重層的なチェックを受けている。</li> <li>・各ユニットには、リーダーに加え、サブリーダーを設定し、多様で高い機動的な運営を可能としている。</li> <li>・ユニットメンバーは、各学部より推薦者を募り、リーダー会議で適材適所に配置している。各学部などの現場での意見を取り入れやすい環境を整えている。</li> </ul>	

## (3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでFD推進センターでは、正課の教育研究に関して、教員と学生それぞれの支援を行ってきた。今後、当センターでは正課外活動を含めた学生の主体的な学習支援との融合が求められる。そのため、中長期的な視点を踏まえリーダー会議でセンター全体の運営などについて検討する。</li> </ul>	

## 【この基準の大学評価】

2020年度より教育開発支援機構内にFD推進センターと学習環境支援センターを統合した教育開発・学習支援センターが設置されたことに伴い、すでに設置されている学習ステーション運営委員会、ピアネット運営委員会、学習支援システム運営委員会に加え、新設された学習環境改善検討委員会の規程が整備されたことは評価できる。

FD推進センターが手がけてきた継続業務の見直しを行い、学内関連組織との連携活動、さらに「FD推進センターにおける業務運用」を改修した「教育開発・学習支援センター業務運用」を引き継いでいる。これまでの活動の継続性に配慮しながら、新たな活動を模索されていることは高く評価できる。FD活動の推進、および各教学組織におけるFD活動の支援として、100分授業の工夫を促す「教員ガイド」の発行、アカデミック・アドバイザーによる「アカデミック・サポート」など、FD推進センターから継続した活動は、「学習支援システム」のリニューアルと合わせ、大いに評価できる。なお、FD推進センターのもとで達成不十分であった「新GPA制度導入に伴う成績評価のあり方に関する検討」については、今後の成果に期待したい。

学習支援として、正課学習を支援する「学習支援ハンドブック」や「T・Aハンドブック」の発行、「Lステゼミ」の開催、「FDセミナー」、「FDワークショップ」、「学生が選ぶベストティーチャー賞」、「FD川柳」などの活動を引き継ぎ、新たに策定した「広報方針」に基づき、「FD学生の声コンクール」を含めて効果的な広報活動を検討されていることは評価できる。新センター内にはFD推進センター3ユニットを継承する「教育サポートユニット」、「学習サポートユニット」、「データ活用推進ユニット」体制が設置され、定期的にリーダー会議を中心にセンター全体として全学的な支援活動の提案・企画・実施・検証する運用が行われ、センター活動を報告・チェックする体制が整っており、高く評価できる。なお、正課外活動を含めたトータルな学生への学習支援については、継続して検討されることを期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

## 2 教育研究等環境

## 【2020年5月時点の点検・評価】

## (1) 点検・評価項目における現状

2.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。	
①学生の主体的な学習を支援するための取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p><b>【学生の主体的な学習を支援するための取り組み】</b> ※箇条書きで記入。</p> <p>学習環境支援センターから正課外学習を支援する2つの活動を引き継いでいる。</p> <p>(1)学習ステーション運営委員会において、学生・教員・職員の協働による学生の自主的・主体的な学習活動のサポートを行っている。</p> <p>(2)ピアネット運営委員会において、ピアネット学生スタッフ研修会を実施、各団体の相互連携を強化している。また、合同構成各団体の学生に対して活動の事前・事後にピアネット・コンピテンシーテストを実施することを依頼し、概ね順調に調査結果を収集している。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>センター内の「学習サポートユニット」が、学習環境支援センターの「学習環境改善検討委員会」「学習ステーション運営委員会」「ピアネット運営委員会」を引き継いでいる。リーダーを取りまとめとして、サブリーダーがそれらの委員会内の提案・企画・実施・検証する運用を行なっている。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・法政大学ピアネット規程</li> <li>・2019年度学習ステーション運営委員会議事録</li> <li>・2019年度ピアネット運営委員会議事</li> </ul>	

## (2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・正課・正課外の学生の主体的な学習を「学習サポートユニット」でトータルに掌握し、効果的な施策を実現できる。	

## (3) 問題点

内容	点検・評価項目
・これまで学習環境支援センターでは、正課外の学生の支援を行ってきた。今後、当センターでは正課での学習支援との融合が求められる。そのため、中長期的な視点を踏まえリーダー会議でセンター全体の運営などについて検討する。	

## 【この基準の大学評価】

<p>学習環境支援センターからは、正課外活動の支援として、学生・教員・職員の協働による学生の自主的・主体的な学習活動のサポートと、ピアネット運営委員会によるピアネット学生スタッフ研修会の実施や各団体の相互連携の強化、そして合同構成各団体学生へのピアネット・コンピテンシーテストの実施依頼を引き継いでいることは、有効な教育環境への対応として評価できる。</p> <p>センター内の「学習サポートユニット」が正課・正課外の学生の主体的な学習をトータルに掌握し、学習環境支援センターの「学習環境改善検討委員会」「学習ステーション運営委員会」「ピアネット運営委員会」を引き継ぎ、リーダーがサブリーダーとともに各委員会内で提案・企画・実施・検証を包括的に運用することで、学生の学習環境の改善に貢献されていることは評価できる。</p> <p>問題点として掲げられた正課と正課外の学習支援の融合についても、積極的に検証されていくことが期待される。</p>
--

## III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育研究等環境
----	------	---------

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

1	中期目標	<p>教育および学びの質の向上を促進するため、教育・学習環境の整備と学生の主体的学習の支援に向けた全学的な施策の企画・提案・調整を行う。(LEC)</p> <p>①市ヶ谷キャンパスの工事が授業運営および学生の学習活動に与える影響を検討の上、改善策や対応策を講ずる。</p> <p>② HOSEI2030 アクション・プラン（教学推進4 アクティブラーニング・実践知育成の学び）に基づき、大人数授業における学生の授業サポーター（ないし学習サポーター）制度の設置に向けて検討を開始する。</p> <p>③第一期中期経営計画に基づき、ピアネット合同企画の実施等、さらなるユニット間の連携強化に取り組む。</p> <p>④第一期中期経営計画に基づき、ピアネット・コンピテンシーおよびパリュールブリックについて検証を開始する。</p>	
	年度目標	<p>①市ヶ谷キャンパスの工事が授業運営および学生の学習活動に与える影響を把握し、対応策を検討する。</p> <p>④ピアネット・コンピテンシーを測るためのピアネット・コンピテンシーテストの試行を開始し、次年度以降に本格実施できるように準備する。</p>	
	達成指標	<p>①市ヶ谷キャンパスの工事における2019年5月以降のフェーズが授業運営および学生の学習活動に支障を生じさせていないかどうかを把握・点検し、必要があれば、可能な限りでの対応策を講じる。</p> <p>④ピアネットを構成する各団体において、ピアネット・コンピテンシーテストを試行実施し（学生は、活動の事前と事後に受検）、結果を検討したうえで、必要に応じて、テストの修正を試みる。</p>	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
自己評価		A	
理由		<p>①市ヶ谷キャンパスの工事に伴う教職員、学生の動線への影響に関して、授業運営や学生の学習活動に支障が生じていないかどうかを把握・点検することに努めたが、特段の問題や困難等は生じなかった。</p> <p>④ピアネットを構成する各団体に、学生に対して活動の事前・事後にピアネット・コンピテンシーテストを実施することを依頼し、概ね順調に調査結果を収集することができた。</p>	
改善策		—	
<p><b>【重点目標】</b></p> <p>上記④。ピアネットを構成する各団体に、活動の事前と事後でのピアネット・コンピテンシーテストの実施を依頼し、結果についての分析と検討を行う。必要に応じて、テストの修正についても検討する。</p>			
<p><b>【年度目標達成状況総括】</b></p> <p>上記④のピアネット・コンピテンシーテストについては、現在、集計と分析を試みている。初年度の施行実施ということもあり、事前・事後のデータセットを正確に取れていないケースも散見されるので、この点は、ピアネットを構成する各団体への依頼において、可能な限りの改善を試みたい。データの分析結果が出た段階で、次年度のテスト実施に関して、必要な改善や見直しについて検討する予定である。</p>			

### 【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

(FD推進センター)	
<p>FD推進センターと学習環境支援センターとの統合による教育開発・学習支援センターの新設は、両センターが抱える諸問題を洗い出し、現実のニーズに適合した支援策を打ち出すために統合の道を選択されたわけであり、マンネリ化や硬直化を避けるためにもきわめて高度な英断であったと高く評価できる。FD推進センターは11の年度目標のうち10項目を概ね達成しており、達成不十分な1項目も引き続き検討対象としており、適切である。FD推進センターのFD活動が教育開発・学習支援センターに引き継がれ、その見直しも進められていることは評価できる。</p>	
(学習環境支援センター)	
<p>2019年度の重点目標は「市ヶ谷キャンパスの工事が授業運営および学生の学習活動に与える影響を把握し、対応策を検討する」ことであったが、学習環境支援センター運営委員会で工事中の歩行者導線について丁寧なシュミレーションを含</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

む慎重な検討を繰り返し行い、移動者数が多いと想定された時限の間の休み時間を2019年度に限り延長を実現し、その周知徹底をHPや「コンパス」で行ったことは高く評価できる。ピアネットについても、学生スタッフ合同研修会における交流や55・58フェアウェルDaysでの教職員・学生による共同出展などの取り組みがあり、年度目標は達成されたと評価できる。学習環境支援センターの教育環境支援活動が新設された教育開発・学習支援センターに引き継がれ、これまでのリソースを有機的に連携する取り組みも行われていることは評価できる。

## IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教員・教員組織
1	中期目標	あらゆる立場の人びとへの共感に基づく健全な批判精神をもち、社会の課題解決につながる「実践知」を創出しつづけることを謳った法政大学憲章を実現すべく、教育および学びの質の向上に向けた全学的な教育支援施策の企画、FD活動の推進および各教学組織におけるFD活動の支援を行う。(FD推進センター)
	年度目標	(1) 全学的な教育支援施策の企画 (1-1) 教育開発・学習支援センターの中長期運営方針の検討 (1-2) 教育開発・学習支援センターが手がけるFD継続業務の点検 (1-3) 教育開発・学習支援センターと学内関連組織との連携 (2) FD活動の推進および各教学組織におけるFD活動の支援 (2-1) 授業改善アンケートの新システム導入とその運用 (2-2) オンライン授業におけるミクロ・マクロレベルでのフィードバック (2-3) 授業改善アンケートと他アンケートとの連携の検討 (2-4) ミドル・レベル(学部・学科単位)でのFD活動支援の拡大 (2-5) 新GPA制度導入に伴う成績評価のあり方に関する指針策定の検討 (2-6) 正課外学習の充実 (2-7) 広報方針に沿った活動強化 (2-8) 学生の主体的な正課学習への支援
	達成指標	年度目標の達成率にて評価する。 S: 80%以上 A: 70-79% B: 60-69% C: 60%未満
No	評価基準	教育研究等環境
2	中期目標	教育および学びの質の向上を促進するため、教育・学習環境の整備と学生の主体的学習の支援に向けた全学的な施策の企画・提案・調整を行う。(LEC) ①市ヶ谷キャンパスの工事が授業運営および学生の学習活動に与える影響を検討の上、改善策や対応策を講ずる。 ②HOSEI2030アクション・プラン(教学推進4 アクティブラーニング・実践知育成の学び)に基づき、大人数授業における学生の授業サポーター(ないし学習サポーター)制度の設置に向けて検討を開始する。 ③第一期中期経営計画に基づき、ピアネット合同企画の実施等、さらなるユニット間の連携強化に取り組む。 ④第一期中期経営計画に基づき、ピアネット・コンピテンシーおよびバリューループリックについて検証を開始する。
	年度目標	(1) 教育開発・学習支援センターが手がける教育・学習環境支援継続業務の点検 (2) 市ヶ谷キャンパスの工事が授業運営および学生の学習活動に与える影響を把握し、対応策を検討 (3) 授業アシスタント制度(授業支援アシスタント、ラーニングサポーター)の安定的な運用 (4) 合同研修会、ピアネット所属ユニットの協同プログラムを実施 (5) ピアネット・コンピテンシーおよびバリューループリックについて検証

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

達成指標	年度目標の達成率にて評価する。 S : 80%以上 A : 70-79% B : 60-69% C : 60%未満
------	---

### 【重点目標】

教員・教員組織の年度目標(1)と教育研究等環境の年度目標(1)をリーダー会議内で検討することを重点目標とした。今年度より発足した当センターの安定的な運営を確立するためにも、改組で引き継いだ事業や活動について整理し、その点検から次期(2022年度より)中期目標の設定に向けて準備する。

### 【目標を達成するための施策等】

教員・教員組織の年度目標(1)に対する施策は、(1-1)「業務内容の申し合わせ策定」と「2022年度以降の中長期目標の検討」、(1-2)「学習支援システム」の導入」と「これまでのFDとLEC業務の経年リストの作成」、(1-3)「学習環境支援調整委員会(仮称)の立ち上げ」と「学習環境改善検討委員会の運営」を行う。また、教育研究等環境の年度目標(1)に対する施策は、「学習環境支援調整委員会(仮称)の立ち上げ」と「学習環境改善検討委員会の運営」と「これまでのFDとLEC業務の経年リストの作成」を行う。

### 【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

教育開発・学習支援センターでは、2019年度新体制への移行が達成されたことから、2020年度目標では、新体制の安定的な運営を確立するために、リーダー会議内で「全学的な教育支援施策の企画」、「教育・学習環境支援継続業務の点検」を検討することを重点目標としている。その具体的な施策として業務内容の申し合わせや新しい委員会の立ち上げ、これまでにFDとLEC業務の経年リストの作成が挙げられており、改組により引き継いだ事業や活動について整理・確認するものとなっている。新体制の安定的な運営を確立するための施策が具体的であり評価できる。「FD推進センター」「学習環境支援センター」時の2019年度に十分達成することができなかった「新GPA制度導入に伴う成績評価の在り方」に関する指針策定の検討も2020年度目標に盛り込まれている。

新体制のもとで集計と分析が試みられ、その改善・見直しについての検討もなされる予定であり、今後の検討・実現に期待したい。

## 市ヶ谷リベラルアーツセンター

### I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

#### 【2019年度大学評価結果総評】(参考)

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、新カリキュラムの完成年度である2020年度まで、その円滑な運営を図るとともに、体系性を重視した新カリキュラムの課題の抽出、見直しの検討が重要な目標となる。2017年度にまとめられた「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」報告書、およびこれに基づいて執行部が提案したILAC内規第12条の見直し案にかかわる議論も重要となる。各学部のカリキュラム等にも少なからぬ影響がある可能性があり、長期的な視野に立ち慎重な検討を期待したい。

#### 【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2020年度に新カリキュラムの完成年度を迎えるこの新カリキュラムの課題の抽出、見直しの検討を行うために、大きく3つのことを行った。

ひとつめは、ILAC関連6学部の学生抽出(48名)による成績別履修サンプリング調査を行い、第9回ILAC運営委員会で評価と課題点を説明・報告した「ILAC科目(旧市ヶ谷基礎科目)年次別履修状況サンプル調査の結果と分析」、2つめは、執行部作成の事前アンケート回答を利用した教育開発支援機構2019年度学生モニター制度の活用(2019年12月20日実施)で、それを詳細にまとめた「教育開発支援機構2019年度学生モニター制度実施報告(ILAC検討資料)」(第9回ILAC運営委員会説明・報告)、3つめは、各分科会が検討し、レポートにまとめた「ILAC新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」(7分科会+7諸語部会)(第9回ILAC運営委員会で説明・報告)である。これら3つから抽出され、あがってきた課題点の情報を「ILAC新カリキュラム Reborn プロジェクト」シートとしてまとめ(第11回ILAC運営委員会で説明・報告)、新旧分科会委員長が出席する3月の第11回ILAC運営委員会で提示し、情報の共有とともに、課題点の解決という目標を継承し、ILAC新カリキュラム Reborn プロジェクトを発足させた。今後はこの3つの成果に従って、具

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

体的な改善を行う予定である。

「市ヶ谷地区教養教育の在り方プロジェクト報告書」に基づいて2018年度に執行部（当時）が提案したいわゆる「ILAC内規第12条の見直し案」については、全分科会、関連6学部全教授会から意見聴取し、一覧表にまとめて運営委員会に提示し、検討したうえで、「内規第12条見直しについて（二次提案）」を作成し、慎重に運営委員会で検討を行った。これは各分科会、関連6学部教授会での慎重な検討・審議ののち、承認された（第8回ILAC運営委員会）。結果的には内規第12条そのものは「現状維持」ではあるが、この「市ヶ谷地区教養教育の在り方プロジェクト報告書」が提議している問題は、カリキュラム・科目担当といった教学的側面、人的側面等のリソースにおけるILACと学部間の協働作業・連携であり、それが教養教育の在り方についての本質的な議論である。

2019年度に、ILACの運営を安定的に行うために「センター長選出方法の一部改正について」を執行部が提案し（第5回ILAC運営委員会）、慎重な審議を重ねて、最終的に各分科会、関連6学部教授会でその「第5次提案」が承認された（第10回ILAC運営委員会）。ここにも記載されたことであるが、「将来的に、学部持ち回り（一表、二表を問わない）による選出方法も考慮に入れて、学部専門教員の市ヶ谷教養教育へのコミットを促進する施策を同時に進める。」として専門と教養の協働、融合、相互浸透を慎重に図ってゆくことが長期的な目標となる。それを各分科会、関連6学部教授会の承認のもとで明示化できた意義は大きいと考える。

2019年度から始まった市ヶ谷キャンパスの8学部長とILAC長が構成メンバーとなっている「市ヶ谷コミュニティ連携会議」での取り組みはまずは、「アーバン・デザイン」サティフィケート・プログラムとなって結実したが、2020年度へのアジェンダとして引き続き議論してゆく「法政スタンダード」は8学部に通底する共通の学を保証するものであり、基礎教育に深く関係するが、相互の特徴を伸長・補完するものが目指される。

### 【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2020年度に新カリキュラムの完成年度を迎えるため、その課題の抽出、見直しの検討のために、「ILAC科目年次別履修状況サンプル調査の結果と分析」、「教育開発支援機構2019年度学生モニター制度実施報告」、「ILAC新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」をまとめ、「ILAC新カリキュラムRebornプロジェクト」を発足させたことは、その課題解決に向けた対応として高く評価できる。

「市ヶ谷地区教養教育の在り方プロジェクト報告書」に基づき、2018年度の執行部が提案した「ILAC内規第12条の見直し案」について、全分科会、関連6学部全教授会から意見聴取した内容をまとめて検討した「内規第12条見直しについて（二次提案）」を作成・検討し、先の関連分科会・教授会で慎重な審議を行い、結果として内規12条そのものが現状維持であったにせよ、その検討・審議は必要な議論であったと評価できる。

ILACの運営を安定的に行うために「センター長選出方法の一部改正について」も審議を重ねて、関連分科会・教授会で承認されたことは、単にセンター長の選出方法にとどまらず、専門と教養の協働、融合、相互浸透を図っていくという長期的な目標を共有できた意義は大きいといえよう。これに加えて、新しくはじまった市ヶ谷キャンパスの8学部長とILAC長で構成される「市ヶ谷コミュニティ連携会議」での取り組みは、「アーバン・デザイン」サティフィケート・プログラムとして結実する一方、2020年度へのアジェンダとして議論していく「法政スタンダード」は基礎教育と深く関わり、市ヶ谷8学部相互の特徴を伸長・補完するものであり、今後の取り組みが期待される。

## II 自己点検・評価

### 1 教育課程・学習成果

#### 【2020年5月時点の点検・評価】

##### (1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

A B

※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）では、0群から5群の科目群までそれぞれバランスよく科目履修を配置し、多岐の分野に亘る幅広い教養が身につけられるようカリキュラム編成している。

2017年度にスタートした新カリキュラムが、2020年度で完成年度を迎える。新カリキュラムは、より順次的に、また、より体系的に教養教育科目を学べるように、従来「基礎科目」として一括されていたILAC各科目群を、ナンバリング100

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。



番台の〈基盤科目〉〈選択基盤科目〉、200番台の〈リベラルアーツ科目〉、300番台の〈総合科目・教養ゼミ〉と「三階建て」に再編したもので、市ヶ谷地区の教養教育カリキュラムとして22年ぶりの新フレームである。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019年度において、市ヶ谷リベラルアーツセンターがその構成メンバーである教育開発支援機構で導入した「課題解決型フィールドワーク for SDGs」 Type BをILACの0群に設置したこと、イオン銀行から講師を招き、共同で科目運営する「リベラルアーツ特別講座（金融リテラシー）」（2020年度開講）の0群への設置の承認、市ヶ谷リベラルアーツセンター長が委員として参加している「市ヶ谷コミュニティ連携会議」における公開科目の活用と文理融合を目指した「アーバン・デザイン」サティフィケート・プログラムへの科目提供（2科目）、法政大学の学生が等しく身に着けているべき共通の教育としての「法政スタンダード」の策定のための検討は、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程のさらなる充実に寄与するものである。

各学部のアセスメント・ポリシーの中に、教養教育の学修成果の測定・評価についての記述を追記してもらうことを6学部に依頼し、執行部案に基づいて改訂作業が行われた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「課題解決型フィールドワーク for SDGs」 Type B（2019年度第3回運営委員会資料7）
- ・「リベラルアーツ特別講座」（2019年度第7回運営委員会資料4）
- ・「アーバン・デザイン」サティフィケート・プログラムへの科目提供（2019年度第7回運営委員会議事録「プロジェクト等の進捗状況について〈報告〉」）

②初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。

S A B

※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

新カリキュラムの「基盤科目」「基盤選択科目」は、高校までの学習と大学でのアカデミックな学習との橋渡しをする役割を自ずと果たしている。ILACでは100番台のナンバリングコードでそれを明示化している。

アカデミック・リテラシー習得の導入の役割をもつ初年次教育については、各学部主催の「基礎ゼミ」等と並んで、0群には一部の学部・学科の初年次ゼミナールに相当する「基礎ゼミ」が開設されている。また1群（人文科学）には、大学生として必要なライティングのリテラシー能力や論文作成能力を育てる「文章論」という科目が開設されている。これらはナンバリングコードにおいて、初年次教育を表すBSP100LA（分野：初年次教育、学部導入教育及びリテラシー教育（Basic study practice））が付されている。

0群のキャリア教育関連科目（次項③参照、ナンバリングコードCAR100LA 分野：キャリア教育（Career education）を付している）や自校教育科目（「法政学への招待」）も、主として1・2年次に履修されることを期して編成された、学部を越えた共通科目である。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・ILACの初年次教育の科目について、アクティブラーニングがどの程度行われているかをシラバス等から調査し、その数字と内容を文書にまとめ、運営委員会に提示・説明・検討し、情報を共有した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「初年次教育におけるアクティブラーニング（実施率と具体的方法・内容）および課題解決型授業PBL（導入・実施状況）について」（2019年度第7回運営委員会資料7）
- ・ILAC科目シラバス <https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AX>

③学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S A B

※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

0群に設置されている「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン応用」は、キャリア教育運営委員会（ILACセンター長も委員として参加）が運営する実践的なキャリア支援教育科目である。ディスカッションやグループワークなどを通して課題発見・問題解決等の能力を養う授業が多く、FD授業アンケートにおける学生の評価も毎年高い。キャリア教育運営委員会は、2017年度に「（目先の就職活動に特化したようなプログラムではなく）正課の授業のなかにこそ就業力養成の意義がある」とする今までの教育理念・方針は堅持しつつ、キャリアセンターを中心として、インターンシップ・就職へも繋がる一貫したプログラムを実現すべく、新たなキャリア教育体制を再構築した。

このキャリア教育体制の強化方針に基づき、2018年度からILACでは新カリキュラムによる授業を行なっている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

すなわち、カリキュラムも、既存のコマ配分を見直して新たに「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン応用」の2種とし、なるべく1年次春学期に導入科目である「キャリアデザイン入門」を履修できるようなカリキュラムに改訂し、2018年度から実施している。

また、英語学位コース（GBP, SCOOP）として「Elementary Career Development」、「Career Development Skills」を0群に設置し、キャリア教育運営委員長とともに共同で科目責任者となって、共同運営している。

また、キャリア教育運営委員会の委員としてILAC長は上記科目の授業参観を行い、授業に対するコメントを通して、質保証に資する提言等を行った。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019年度より英語学位コース（「Elementary Career Development」、「Career Development Skills」）をキャリア教育運営委員長と共同で科目責任者となり、協力して担い、運営している。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

市ヶ谷リベラルアーツセンター規程施行細則（内規）2019年12月14日一部改正施行（第10条第5項第4号）、および2019年度第8回運営委員会資料5

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S  A B

**【履修指導の体制および方法】** ※箇条書きで記入。

- ・学生の履修指導は、学部の「履修の手引き」と全学共通仕様のWebシラバス（全文掲載）で行なっている。
- ・一般的な履修説明は学部ガイダンスで行われている。情報科学分科会、英語分科会、保健体育分科会でも、学部執行部に依頼して学部ガイダンスに必要な事項を反映させて行なったり、その場において独自に履修説明を追加したりしている。その他、特別なガイダンスが必要な科目においては、各科目担当者が初回の授業内でのガイダンスを行なっている（例；サイエンス・ラボA・B、スポーツ総合演習）。
- ・上記の、分科会によって必要に応じて行なってきた従来の履修ガイダンスに加えて、2018年度に新入生ガイダンス案を作成し、運営委員会に提示し、各学部への説明を要請した。これは新カリキュラムの順次性（体系性）を活かした、ILAC科目の望ましい履修計画を例示しているものである。
- ・窓口での履修指導は、各学部窓口とILAC事務局が共同して対応している。各科目には、専任教員の科目責任者を配置し、必要に応じて、科目責任者による指導も行う。保健体育分科会では、保健体育センター窓口でも履修指導を行なっている。
- ・ILACではシラバス通りに授業運営がなされたか、また、受講生の意見や授業アンケートの結果等を踏まえて、「後シラバス」（当該学期終了後のシラバス執筆者によるシラバスチェック＝自己点検）を行っている。この「後シラバス」の実施率も調査し、ILAC運営委員会で報告し、各分科会での実施向上を図っている。これによって学生の要望や意見を早めに自身の授業に反映することができる。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

特になし

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S  A B

※取り組み概要を記入。

シラバスによる指導方針を明示し、個々の教員はオフィス・アワーを設定して個別指導を行なっている。また、各分科会はそれぞれ独自の学習指導体制を整えており、「基礎ゼミ」、「法政学への招待」、キャリア教育関連科目においても、それぞれを主管する組織体が独自に学習指導を行なっている。

2018年度秋学期期末「学生による授業改善アンケート」の集計結果、「学生による授業改善アンケート」に係る分析結果、2018年度「授業改善アンケート」全学集計結果報告書、2019年度春学期期末「学生による授業改善アンケート」の実施結果、2019年度秋学期期末「学生による授業改善アンケート」の実施・集計結果について、「【大学評価室】2018年度卒業生アンケート調査結果について（報告）」をILAC運営委員会にて提示・説明し、意見交換して、問題点を検討した。また分科会委員長から各分科会メンバーに情報共有を図っている。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生による授業改善アンケート（2019年度1回運営委員会資料7、第3回運営委員会資料14、第4回運営資料14、第7回運営委員会資料10、第11回運営委員会資料18）</li> <li>・卒業生アンケート（2019年度第10回運営委員会資料22-7、2019年度内部質保証委員会）</li> </ul>	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S A B
<p>※取り組み概要を記入。</p> <p>シラバスに【授業外に行うべき学習活動（準備学習等）】を明示することで、学生の学習時間を確保することに努めている。この項目の記載については、年度末にすべての科目に関してシラバスチェックを行い、その指示が適正に行われていることを確認している。これに加えて、各分科会、基礎ゼミ担当学部、キャリア教育関連科目責任者、自校教育（「法政学への招待」）科目責任者が、それぞれに独自の方策をとっている。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>大学設置基準に基づいた学生の授業の準備学習時間（予習・復習）を標準時間で必ずシラバスに記載することとした。シラバスの第三者確認を分科会委員長、科目責任者、執行部でチェックの責任を明確にした分担を行い、全科目の準備学習時間の記載が完全に行われているかの最終チェックを事務局と執行部が行い、100%の記載を確認した。</p>	
<b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・2019年度第8回運営委員会資料18・19、第9回運営委員会資料25、第10回運営委員会資料26</li> </ul>	
④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S A B
<p><b>【具体的な科目名および授業形態・内容等】</b> ※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2014年度シラバスから「授業の概要と方法」の欄においてPBL（課題解決型授業）・グループワーク・プレゼンテーションの有無の記入項目が追加されたことを受けて、これらの方法を積極的に導入する科目が増えてきている。</li> <li>・2017年度実施の新カリキュラムにおいて、「総合科目」内に演習形式の「教養ゼミ」を設置し（履修年次は2年生以上）、少人数によるアクティブラーニング授業として2018年度にスタートした。</li> <li>・ILACではシラバス通りに授業運営がなされたか、また、受講生の意見や授業アンケートの結果等を踏まえて、「後シラバス」（当該学期終了後のシラバス執筆者によるシラバスチェック＝自己点検）を行っている。この「後シラバス」の実施率も調査し、ILAC運営委員会で報告し、各分科会での実施向上を図っている。これによって次回からの授業・教育の質の改善が見込まれる。</li> </ul> <p>分科会単位で行われている特筆すべき取り組みは、以下の通りである。★</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>人文科学分科会</b>が設置している「文章論」では、科目の開講当初より、テーマに沿った小作文執筆を受講生に課し、それに対する個別のコメントを含めた添削指導を学期内に複数回行うという形で、双方向授業を展開している。またそのうちの優れた作文をテキストとして使用し、受講生の文章を読みあうことで、高度な文章力についての認識を相互に深め合っている。</li> <li>・<b>社会科学分科会</b>では、科目ごとに、音楽や映像を積極的に活用したり、独自作成資料を授業支援システムで配布したりするなどして、教育効果の向上に努めている。2018年度には、囲碁を用いて戦略的思考を学ぶ教養ゼミを開講した。「法学Ⅰ・Ⅱ」では、初学者に対する法学基礎の教育の充実に向けて、①法律学の一般的・包括的内容、②日本国憲法の基礎、③国際法の基礎の3つを柱として含んだ内容構成に科目全体で取り組んでいる。</li> <li>・<b>自然科学分科会</b>の「サイエンス・ラボA・B」は文系キャンパスにおける貴重な理系実験科目である。当科目では、班分けすることによってグループで課題に取り組む環境を設定し、アクティブラーニングによる教育効果の向上に努めている。このほか、どの科目においても、文系学生にも分かりやすい理系の授業を心がけており、当分科会教員が参加する「自然科学センター」のサイエンス・コミュニケーション活動、「サイエンスカフェ」の催しも、文系学生に対する啓発に努めている姿勢の表れである。</li> <li>・<b>情報学分科会</b>では、タイピングの速度を測定するソフトウェアを用いて目標を設定し、また文書作成・表計算・プレゼンテーションなどのソフトウェアを使える能力を上げるための練習問題を用意して学生に作成したファイルを提出させるなど、教員・学生双方が学習成果を具体的に測定しやすいよう工夫を行なっている（2.4②参照）。</li> <li>・<b>英語分科会</b>では、習熟度別の少人数クラス編成で、学習者同士が習得言語を使った練習・交流・ディスカッション・発表など参加型の授業を行っている。また国際文化学部生を対象に、リスニングの自己学習を促すために、インターネット上の無料リスニング教材を紹介するハンドブックを配布し指導している。また、エッセイライティングの手引きとなるハンドブックも補助教材として使用している。</li> </ul>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・**諸語分科会**では、語学教材だけでなく、政治・文化に関する視聴覚メディア・資料を採り入れ、また、独自に編集し作成したマルチメディア教材等も用いて、外国語を通して異文化の総合的理解を促す授業を拡大する（ドイツ語）、AV 資料を適宜活用しながら学生の関心に沿った授業運営を行う（スペイン語）、授業における対面授業と e ラーニングを利用した授業外学習を組み合わせたブレンド型学習を逐次拡大する（中国語）、視聴覚授業内容の年次別区分を新たに実施する（フランス語）、1 年次授業で統一教科書を用いリレー方式の授業運営を行なう、また授業支援システムに副教材をアップロードして授業外学習に役立てる（朝鮮語）等、言語ごとの特性と実情に合わせた多様な試みが行なわれている。なお、学生アシスタント制度「ラーニング・サポーター」を活用して、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語は専任担当教員が運営責任者となって、正課外のピア・ラーニング活動として「多言語カフェ」を運営し、留学生と当該語学履修者(学生)の協同によって学生の語学運用能力の向上に努めている。また、2020 年度「ラーニング・サポーター」実施についても報告し、その活用が各分科会で決定した（2019 年度第 9 回 ILAC 運営委員会）。

・**保健体育分科会**では、演習科目における実習において、以下に示した課題を通じてアクティブラーニングによる課題解決型の教育推進に取り組んでいる。

- 1) 学生自身の体力を把握させるための体力測定（筋力・柔軟性・敏捷性・瞬発力）および身体組成測定を教材として扱い、学生相互に協力しながら測定に取り組める環境を設定し、測定結果を個々に分析し、体力に関する問題を見出させ、今後の課題を設定させている。
- 2) 体力に関する今後の課題の解決に資する知識や方策を提供するとともに、その一端として、トレーニングセンター内の各種機材を安全かつ適切に使用するための指導を授業時間内に行うとともに、学生の将来の健康の保持増進に資する授業外に取り組むべき自己学習課題としてトレーニングセンターの活用を促し、教育効果の向上に努め、トレーニング環境の整備にも配慮している。
- 3) 卒業後の実社会において極めて重要となる他者とのコミュニケーションを自然発生的に促すための方策としてスポーツ実技を教材としたグループワークを通じてリーダーシップの発揮や問題解決などの能力の啓発に努めている。
- 4) 疾患または障がいなどを有し、基礎科目「スポーツ総合演習」の受講（前述の 1～3）が困難である学生を対象とした「スポーツ総合演習（アダプテッド・コース）」を開講し、教育の質的保障に努めている。

・**基礎ゼミ**（文学部、キャリアデザイン学部等）は主体的な学びのためのアカデミック・リテラシーを修得させる少人数授業であり、プレゼンテーションやディスカッション、グループワークを積極的に採り入れたアクティブラーニング型の授業形態にしている。

・**「法政学への招待」**（自校教育）は自分の通う大学について知ること、そこで学ぶ意義や役割を考える科目として開講された。本学の歴史や現在を扱う中で、地域連携活動や社会貢献、海外との交流にも重点を置くことで、国内的・国際的な幅広い視野を獲得できるように努めている。オムニバス形式でその都度適切な講師のキャスティングを行う一方で、常に科目責任者も参加することで、科目としての一貫性を保持している。毎回、授業の最後にクリッカーを使った振り返りを行い、学習内容を確認させている。グループワークの機会を数回程度設けて学生たちの主体的な参加を促している。とくに最終回の授業では、授業内容に基づいた大学の将来に対する提言を作成し、優秀な提言には総長が賞を与えることで大学に対する貢献の場を提供する。「法政学への招待」で得た興味関心をさらに発展できるよう、上位科目として「法政学の探究 LA/LB」を開講し、体系化を図っている。

・**キャリア教育関連科目**では、独自に作成したビデオ教材を用いて、大学で学ぶことが将来の仕事にどう役立っているのかを理解させたり、グループディスカッションでテーマ設定をして意見交換をさせたりするなど、学生の参加意識を高めるようにしている。また 2013 年度に就業力を構成するコンピテンシーを測るために独自に開発した測定テスト（HAT）を受講者に対して継続的に実施するとともに、インターンシップの新方式として考案した、企業との提携によるビジネスコンテストへの受講生の参加など、授業の内外で動機付け・スキル取得・スキームの実践を図り、科目の持つ達成指標への到達度向上と同時に指標そのもののレベルアップに役立っている。

**【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・教育開発支援機構のプランに基づき、2019 年度に社会（企業、市民活動団体等）と連携した課題解決型フィールドワーク科目 type B を 0 群に設置した。ILAC からこの科目に応募があり、採択・実施された。
- ・「基礎ゼミ」「基礎ゼミ I/II」「文章論」「キャリアデザイン入門」の科目において、アクティブラーニングの具体的方法・内容、課題解決型授業 PBL の導入・実施状況を調査し、報告、検討、情報共有を行った。
- ・2020 年度「ラーニング・サポーター」実施について報告し、その活用が各分科会で決定した。
- ・2020 年度千代田区キャンパスコンソに ILAC から多くの科目を提出した。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・後シラバス（2019 年度第 8 回運営委員会資料 18 および第 11 回運営委員会資料 7）

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題解決型フィールドワーク科目 for SDGs (2019年度第3回運営委員会資料7、第4回運営委員会資料8、第8回運営委員会議事録)</li> <li>・「初年次教育におけるアクティブラーニング(実施率と具体的方法・内容)および課題解決型授業PBL(導入・実施状況)について」(2019年度第7回運営委員会資料7)</li> <li>・2020年度「ラーニング・サポーター」(2019年度第9回運営委員会資料13)</li> <li>・2020年度千代田区キャンパスコンソ単位互換 提供科目 (2010年度第8回運営委員会資料14)</li> <li>・ILAC科目シラバス <a href="https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AX">https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AX</a></li> </ul>	
⑤それぞれの授業形態(講義、語学、演習・実験等)に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S    A    B
<p>※どのような配慮が行われているかを記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・必修語学は一クラスの定員を設定し、少人数制授業の効果が出るよう配慮している。</li> <li>・演習・実験科目や、ナンバリング300番台(高度な教養)の総合科目に関しても、定員制を採用する科目が多く、適正な受講者数を実現している。</li> <li>・一般の講義科目については、過多(大規模)受講者授業に対してその適正化を図るため、学習権に配慮しながら、議論と検討を重ね、2019年度の承認に基づき、2020年度4月より事前抽選制を導入した。前年度の履修者が550人を超えた科目については翌年度は事前抽選対象科目とし、さらに原則300人以上550人以下(300人未満も可)を目安に各分科会で必要と認めた科目を抽選対象科目とするものである。この事前登録による抽選システム導入によっていわゆる大規模授業における一授業あたりの履修者数(学生数)の適正化が担保できるようになった。</li> <li>・人間環境学部とキャリアデザイン学部の英語必修クラス授業の定員が、2018年度より、従来の28名以内から24名以内に改善され、市ヶ谷地区6学部平等の英語の授業環境が実現した。</li> <li>・2019年度より諸外国語の必修クラス授業について、入学者の希望に、より即したクラス配分の改善案を執行部から提案し、承認を得た。</li> <li>・大学の授業スリム化方針において、「例外科目」ルール作成を2018年度に引き続き行い、カテゴリーとして例外科目を策定することがあらためて承認された。それに基づいて、カテゴリー「文理融合科目」として「サイエンス・ラボA・B」をあらたに「例外科目」として承認した。その後も各分科会で、最新の各科目履修者数のデータ等をもとに、現場の切実な課題として、改善策も含めた対応に継続的に努めている。</li> </ul>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大規模授業における事前登録抽選制の導入の決定・承認。</li> <li>・スリム化「例外科目」の考え方の検討と「文理融合科目」カテゴリーの新規承認</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・諸外国語の必修クラス授業のクラスルール (2019年度第2回運営委員会資料4)</li> <li>・「授業科目のスリム化について(五次提案)」(2019年度第4回運営委員会資料5および議事録)</li> <li>・「新カリキュラム施行に伴う履修者数動向表の分析について(分析結果の共有)」(2019年第3回運営委員会資料11)</li> <li>・「2020年度ILAC科目教室割付指針について&lt;再提案&gt;」(2019年度第2回運営委員会資料5および議事録、第3回運営委員会資料5および議事録、第4回運営委員会資料4および議事録、第5回運営委員会資料5および議事録、第6回運営委員会資料7および議事録、第7回運営委員会資料3および議事録)</li> </ul>	
1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S    A    B
<p><b>【確認体制および方法】</b> ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・シラバスの「成績評価基準」を明確化し、学生に公開することで公平性を担保している。成績評価基準が曖昧なシラバス原稿については、オンラインでのシステムがリニューアルされたことにもとない、分科会委員長、科目責任者、執行部による第三者確認を行い、コメントをつけて本人への修正依頼が自動メール配信で行われ、確認完了までそれを繰り返すことによって、100%のチェックを完了した。その際に成績評価基準の%や数字表示による記載をすべての科目で行っている。</li> </ul>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>システムリニューアルにもとない、シラバスの第三者確認の担当を明確化し、100%の確認完了となるまで、事務局と執行部が最終調整・依頼を行った。これによって、成績評価と単位認定については、適切性を確認された。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・2019年度第8回運営委員会資料19、第9回運営委員会資料25、第10回運営委員会資料26</p>	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布の状況を把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <p>・ILAC全体としては、セメスター毎のGPCA集計の結果を報告し、運営委員会を通じて分科会・学部で共有することで、横断的な成績評価の適切性を検証している。</p> <p>・自然科学分科会におけるオムニバス形式授業の「サイエンス・ラボA・B」では、全体的な成績の分布傾向を把握しており、授業間でGPAに偏りがある時には兼任講師も含めた担当教員全体に周知されている。</p> <p>・諸語分科会の一部の言語では、統一試験を実施することによって市ヶ谷全体の成績分布を把握している。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・【FD】2019年度春学期GPCA集計結果（2019年度第11回運営委員会資料19）</p>	
②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>ILAC科目は、教養教育カリキュラムとして幅広い分野に亘り、豊かな多様性を特徴特長とするため、ILAC全体（運営委員会）としては、FD授業評価アンケートや卒業生・新入生アンケート、GPCA分布等に関するILACカリキュラム全体の結果を成果指標として利用している。</p> <p>また、教養教育の全体的な学習成果の測定方針として、ILACの「アセスメント・ポリシー」を策定し、これをILAC関連6学部を提供し、学部「アセスメント・ポリシー」に適宜組み込む形式で指標の設定を明示的に行った。</p> <p>さらに、以下に例示するような各分野（分科会）の特性に応じた分科会単位の取り組みを行っている。</p> <p>・<b>情報学分科会</b>では、タイピングの速度を測定するソフトウェアを成果の指標に用いて、目標の入力速度を達成するように指導している。文書作成・表計算・プレゼンテーションなどのソフトウェアを使える能力の評価は、作成すべき文書・表・発表資料などを練習問題として提示し、学生に作成したファイルを提出させて成果の指標とし、それを3～4段階で評価するようにしている。</p> <p>・<b>英語分科会</b>では、十分な検討を重ねてその信頼性が担保できる外部試験を活用し、さまざまな科目において習熟度別クラス編成を行い、また学生の英語運用能力の把握に努めている。また、1年次の必修クラス授業English1で学生に書いてもらう「大学での英語学習計画」は、学生個々の卒業後の進路希望や4年間で身につける英語能力の具体的な目標、および1年間の目標（春学期初め）、そして学期末ごとに自らの学習成果を記述するシートであり、学習目標の設定や学びの省察を促す。</p> <p>・<b>諸外国語分科会</b>（略称：諸語分科会）では、言語ごとに工夫が見られる。ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語・スペイン語では、毎回あるいは数回ごとの成果確認の指標として小テストが実施されている。また中国語では、現在促進しているブレンド型授業（教室での対面授業＋授業外のeラーニング）の成果測定のために、授業外学習の履行を（web上で）チェックする体制をとっている。</p> <p>諸語分科会全体として当然ながら、諸語をコミュニケーション言語とする諸語圏への留学者数や、各言語に関する検定試験の受験者数とその成績なども、大切な指標の一つとなっている。</p> <p>・<b>キャリア教育関連科目</b>では、毎回の講義でのリアクションペーパーとともに、HAT（1.2④参照）の結果を用いて学生の指導を行っている。リアクションペーパーについては、毎回成績をつけ、定期試験の成績と総合して、最終の成績評価としている。また、HATについては、予算の制約もあって、全キャリア関連科目ではなく、一部の科目の受講生に実施している。</p> <p>その結果と就職先の関係を分析すると、HATで高い点数を獲得した学生は、就職活動においても満足いく結果になっていることが確認できた。</p> <p>上記は分科会単位の取り組み例であるが、授業担当者個々は、基本的に試験やレポートによる成績評価に基づき学習成果を測定しているほか、毎回の成果をリアクションペーパーにより調べている教員も多い。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>・「ILACアセスメント・ポリシー」の策定</p> <p>・「ILACアセスメント・ポリシー」の関連6学部アセスメント・ポリシーへの教養教育部分としての編入依頼</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・2019年度第2回運営委員会資料9および議事録	
③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。</p> <p>ILAC 全体（運営委員会）では、FD 授業改善アンケートの結果のほか、卒業生アンケートや新入生アンケートの満足度や「授業で身についたこと」（卒業生）についての集計結果等を運営委員会にて資料として示し、執行部の分析報告ののち意見交換を行い、情報を共有している。</p> <p>分科会単位の取り組みについては前項 1.4②に例示した通りであり、運用は各分科会・セクションに一任されているが、個々の取り組みの報告は内部質保証委員会のチェックを経て運営委員会で紹介され、相互啓発を期して情報共有される。</p> <p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生による授業改善アンケート（2019年度1回運営委員会資料7、第3回運営委員会資料14、第4回運営資料14、第7回運営委員会資料10、第11回運営委員会資料18）</li> <li>・卒業生アンケート（2019年度第10回運営委員会資料22-7、2019年度内部質保証委員会）</li> </ul>	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を組織的・定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2017年度のILAC内部質保証委員会にて、新カリキュラムの体系性（履修の順次性）の成果を測るための新規の指標を導入する必要が提起され、具体的なアイデアとして6学部の学生の成績サンプル調査を2018年度に試行した。</li> <li>・授業改善アンケートの項目のなかで主として「平均予習・復習時間」「授業で身についたこと」の結果について、運営委員会において審議の後、学部・分科会で共有することで、検証を行っている。</li> <li>・「法政学への招待」（自校教育）およびキャリア教育関連科目では、定期的に開催されるそれぞれの運営委員会で教育成果の検証をおこなっている。</li> <li>・2019年度12月に、教育支援開発機構の学生モニター制度を活用して「市ヶ谷教養教育（ILAC）のカリキュラム内容、学修方法について」をテーマにしたモニタリングを行なった。その際、まず事前アンケートを参加学生全員に回答してもらい、その結果を執行部で問題点・テーマ別にクロス集計し、そのうえでモニタリングに臨んだ。また、モニタリングの結果を「教育開発支援機構 2019年度学生モニター制度実施報告（ILAC検討資料）」としてまとめ、資料を2019年度第11回運営委員会にて配布・報告した。また、この資料をもとに、「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」シートにまとめ、ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクトを発足させた。このモニタリングによって学生の視点からみた新カリキュラムの課題点・問題点、科目の受講・登録の際の利便性、履修指導や科目への要望等を認識することができた。</li> <li>・2018年度に引き続き、新カリキュラムにおける学生の科目の履修状況に対する分析を通して、新カリキュラムの順次性と体系性の成果を測定し、また課題点を発見することを目的とした年次別履修状況サンプル調査を行った。本調査は、年次別、GPAスコア別の単位履修状況、体系性（順次性）を意識した履修計画の有無、履修した科目の成績、さらに所要単位以上の履修状況にも着目することによって、総合科目・教養ゼミ、選択科目等に対する学生の興味・関心ある分野等を調査するために、ILAC参加6学部の学生から、計48名を抽出して行うものであるが、新カリキュラムの成果や課題点の抽出も検証している。この検証結果を「ILAC科目（旧市ヶ谷基礎科目）年次別履修状況サンプル調査の結果と分析」レポートにまとめ、ILAC運営委員会に提示し、説明・検討を加え、さらに「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」シートにまとめ、ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクトのひとつの柱とした。</li> <li>・ILACを構成する7分科会に（諸語分科会ではドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、朝鮮語、ロシア語、日本語の各言語部会に）ILAC新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について、現状、現在の/今後の対応策、それによって見込まれる展望等について検討を依頼し、各分科会はその検討結果を報告書（「ILAC 新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」全部で14の報告書）にまとめ、運営委員会で提示・説明・情報共有を行った。これに基づいて2020年度から新カリキュラムの多岐にわたる改善、構造的なリニューアルを行うことにしている。また、分科会とILACがどのように取り組むかを分科会別に示した一覧を「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」シートに</li> </ul>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

編入し、ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクトの基礎資料とした。

- ・「キャリアデザイン入門」については同科目担当者で「キャリアデザイン入門 勉強会」を開き、授業に関する情報共有、課題点の発見・指摘、また改善を行っている。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・2019年度12月に、教育開発支援機構の学生モニター制度を活用して「ILAC 教養教育」をテーマにしたモニタリングを行なった。事前に参加学生にアンケートを配布し、回答させ、それを事前に分析、クロス集計した。その結果を「教育開発支援機構 2019年度学生モニター制度実施報告 (ILAC 検討資料)」としてまとめ、資料を2019年度第9回運営委員会にて配布・報告した。さらに「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」シートにまとめた。
- ・次別履修状況サンプル調査を実施し、その結果を「ILAC 科目 (旧市ヶ谷基礎科目) 年次別履修状況サンプル調査の結果と分析」レポートにまとめ、ILAC 運営委員会で説明し、これを「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」シートにまとめた。
- ・各分科会が ILAC 新カリキュラムにおける課題や改善策を検討し、「ILAC 新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」シート (全14 報告書) にまとめた。
- ・上記3つの検討結果を基礎資料として ILAC では新カリキュラムの抜本的、構造的なリニューアルを行う「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」を発足させた。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「アセスメント・ポリシー (「学習成果の把握に関する」方針に基づく特色ある取り組み—ILAC (市ヶ谷リベラルアーツセンター) の取り組み例) 2019年度第2回学部自己点検懇談会 (発表型) 2020年2月27日」PowerPoint ファイル (新型コロナウイルスによってファイルによる閲覧形式となった。URL : <https://dnet.hosei.ac.jp/cgi-bin/dneo/z.cgi?lis9hqmX0rlo>)
- ・3月3日大学評価室発【大学評価室】「2019年度第2回自己点検発表資料の共有について」および2019年度第9回運営委員会資料7
- ・「教育開発支援機構 2019年度学生モニター制度実施報告 (ILAC 検討資料)」(2019年度第9回運営委員会資料21)
- ・「ILAC 科目年次別履修状況サンプル調査」(2019年度第9回運営委員会資料19)
- ・「ILAC 新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」(全14 報告書) (2019年度第9回運営委員会資料20)
- ・「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」シート (2019年度第11回運営委員会資料25)
- ・第3回キャリア教育運営委員会議事 (新型コロナウイルスのため、3月11日発、メール審議)
- ・「3」「キャリアデザイン入門」担当教員勉強会について (報告: 大八木委員) 【報告内容】添付の報告書 (資料3: 「キャリアデザイン入門」勉強会報告) 参照。2020年1月31日開催

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。

S  A B

**【利用方法】** ※簡条書きで記入。

- ・前年度の授業改善アンケートの各設問の結果について、運営委員会において分析・考察し、分科会・学部と情報共有を行っている。
- ・各教員にはシラバス入力項目として「学生による授業改善アンケートからの気づき」を設定し、授業改善アンケートに基づく改善内容の公開を義務づけている。ただし「法政学への招待」(自校教育) はオムニバス形式であり、平準化して書くことが難しいと思われるため、既成の授業改善アンケートは実施していない。その代わりに、リアクションペーパーを毎回書かせてフィードバックしているほか、学期末試験の際に独自アンケートを実施し、それらを集計・分析して受講生の現状把握や授業の改善に活用している。そうした受講生の声をまとめて、大学のWEB上で紹介している。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ILAC 科目シラバス <https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AX>

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
ILAC は分野が人文、社会、自然科学、情報処理、外国語、保健体育と多様であり、それらが基本的に関連6学部の学生に開かれている。また0群という先端的、特徴的な科目群を持ち、そのなか	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。



には自校教育である「法政学」、初年次教育またリメディアルの要素も持つ「基礎ゼミ」「文章論」「情報処理演習」などがあるが、2019年度にはあらたに「課題解決型フィールドワーク for SDGs」が設置され、2020年度から開講されるイオン銀行と共同で行う「特別講座（金融リテラシー）」の設置が2019年度に承認された。

こうした多様な科目群において、学修成果の把握は科目担当者ごと、部会、分科会単位で厳密に行われており、またILACの「アセスメント・ポリシー」を作成したことは上述したが、ILAC全体としては、教育支援開発機構の学生モニター制度を活用して「市ヶ谷教養教育（ILAC）のカリキュラム内容、学修方法について」をテーマにしたモニタリング、2018年度に引き続いて行った新カリキュラムにおける学生の科目の履修状況に対する年次別履修状況サンプル調査、7分科会が調査、検討してまとめた「ILAC新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」レポートの3方向から学修成果を俯瞰的に概観でき、新カリキュラムの順次性と体系性の成果を測定し、また課題点を発見できる一次資料を構築できたことの意味は大きく、今後はこれに対応してゆくことが課題となる。

### (3) 問題点

内容	点検・評価項目
上記の(2)に基づいて2020年度から新カリキュラムの検証を行うが（「ILAC新カリキュラム Reborn プロジェクト」）、そうした俯瞰的な検証をまた、分科会、部会、科目担当者にフィードバックして、科目/科目群特性に応じて、様々な手法を用いた個別的な学習成果の把握・測定を行う必要がある。	

### 【この基準の大学評価】

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、幅広い教養が身につけられる新カリキュラムの編成が行われたことで、より体系的な学びができるようになり評価できる。「法政スタンダード」策定のための検討などの取り組みも大いに評価できる。初年次教育・高大接続については、フレキシブルなカリキュラム編成となっており、適切な配慮がなされている。キャリア教育については、適切に提供されている。

履修指導は、各学部の「履修の手引き」と全学共通仕様のWebシラバスで行われており、適切である。学習指導は、シラバスによる指導指針の明示とオフィス・アワーによって個別に行われているほか、各分科会などでは独自の学習指導も行われている。シラバスに「授業外に行うべき学習活動」が明示され、学生の学習時間を確保している。1授業あたりの学生数について、必修語学は少人数制授業、演習・実験科目や総合科目においても定員制を採用し、適切である。諸外国語の必修クラス授業について、入学者の希望に即したクラス配分の改善は評価できる。

成績評価基準の適切性について、シラバスの「成績評価基準」の明確化を通じてその公平性を担保するとともに、シラバスの第三者確認の担当を明確化し、100パーセントの確認完了となるまで事務局と執行部が最終調整を行い、成績評価と単位認定の適切性を確認したことは大いに評価できる。

成績分布の状況は、運営委員会においてセメスター毎にGPCA集計の分布を通じて行われ、横断的な成績評価の適切性が検証されている。学習成果の測定は、各種アンケートに加え、各分科会で特徴的な測定方法を工夫しており評価できる。

## 2 教員・教員組織

### 【2020年5月時点の点検・評価】

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部（学科）等内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S A B

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・授業改善アンケートを分野別・言語別・学部別等に集計し、その集計結果をFDの素材として各分科会・学部で共有してきた。
- ・3種類の授業参観（相互授業参観、新人研修としての授業参観、ビデオカメラを用いたセルフ授業参観）を設定し、各分科会・学部の状況に合わせた形式で実施している。また、各分科会で専任・兼任講師合同の「FD懇談会」も開催している。
- ・センター内に内部質保証委員会を設置し、質保証についての検討を適宜行っている

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p><b>【2019年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】</b> ※簡条書きで記入。</p> <p>・下記の根拠資料2点目（2019年度内部質保証委員会資料）のうち、p24以降のFD授業参観実施状況報告集（計20頁）参照</p>
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>「相互授業参観」において、当該年度着任の専任教員については必ず授業参観を行うルールを策定し、承認された。</p>
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・2019年度内部質保証委員会実施報告（2019年度第11回運営委員会資料24）</p> <p>・「2019年度内部質保証委員会資料」（2020・3・26実施。2020年度第1回運営委員会にて回覧。および2020年度第1回運営委員会議事録）</p>

## (2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>市ヶ谷関連6学部の教養教育の、セメスター単位で2000コマ超の授業を管理運営する学部間協働の運営組織として、現在の制度、枠組み、組織体制のスキームの中ではカリキュラム設計・運営、授業管理、組織運営等十分有効に機能しているといえる。</p> <p>ただし、専門教育と教養教育がそれぞれ独自にカリキュラム設計や科目担当をしている限界は存在する。</p> <p>今後は学部専門教育を主とする教員と教養教育を担う教員と共同で、教養教育の科目を担当し、またカリキュラム設計自体をすり合わせて行うといった協働体制が必要となってくる。</p> <p>また、ILAC執行部会議、ILACでの様々な次元での対応においては学部のそれに比して事務主任を始めとする事務局の貢献は特筆されてよい。事務的な処理にとどまらず、さまざまな調査・統計、企画立案、施策改善・対応策、施策実施後の将来展望などをともに構築していくことによって、市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）は最大限のパフォーマンスを発揮し得ているといえる。こうした観点から事務局が果たす役割は教員・職員の協働参画のモデルケースといえる。</p>	

## (3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>2018年度に策定された「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト報告書」（2018年3月）においては、ILACの業務は各分科会のコアメンバーである別表2教員が主体として担っているため、1表教員の教養教育への参画意識を従来よりも高めることが一つの大きな目的となっている。</p> <p>「教養教育」の重視は大学の認識であり、1表・2表教員を問わず、各学部の専門教育課程とILAC科目のカリキュラムとの垣根をこえて俯瞰する柔軟な視野が求められる。(2)「長所・特色」でも述べたように、専門教育と教養教育がそれぞれ独自にカリキュラム設計や科目担当をしている限界を乗り越えるために、学部専門教育を主とする教員と教養教育を担う教員との科目担当やカリキュラム設計面での協働体制が必要である。2019年度にILACの着実な運営のために「センター長選出方法の一部改正についての提案、承認を行った。そこでは「将来的に、学部持ち回り（一表、二表を問わない）による選出方法も考慮に入れて、学部専門教員の市ヶ谷教養教育へのコミットを促進する施策を同時に進める。」という文言を入れることによって、こうした協働体制、協力関係、相互浸透を作り上げていくことになる。</p> <p>なお、市ヶ谷コミュニティ連携会議に市ヶ谷地区の8学部長とともに、ILACセンター長が参加し、学部横断的なカリキュラム「アーバン・デザイン」サティフィケート・プログラムの成立に至った（ILACからの科目提供）こともそうした協働のひとつと捉えられる。</p>	

## 【この基準の大学評価】

<p>市ヶ谷リベラルアーツセンターでのFD活動は、授業改善アンケート、3種類の授業参観、センター内の内部質保証委員会を通じて行われており、適切である。ILAC執行部会議やILAC活動におけるさまざまな対応については、事務局の貢献が大きく、教員・職員の協働参画の優良事例として学内のモデルとなりうるものである。</p> <p>2017年度の策定された「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト報告書」では、ILACの業務が各分科会のコアメ</p>
---

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

ンバーである別表 2 教員が主体的に担っているため、1 表教員の教養教育への参画意識を高めることが一つの大きな目的となっている。1 表教員・2 表教員を問わず、各学部の専門教育課程と ILAC 科目のカリキュラムとの垣根を越えて俯瞰する柔軟な視野が求められており、学部専門教育を主とする教員と教養教育を担う教員との科目担当やカリキュラム設計面での協働体制が必要であるが、大学全体のなかで考えていかなければならない課題であり、大所高所からの意見交換を通じて改善されることを期待したい。

### III 2019 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	2017 年度「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」の報告書を参考材料とした議題を運営委員会において設け、各学部・分科会独自のアイデア・提案も募りながら、市ヶ谷地区における教養教育の幅を広げる（リソースをさらに豊かにする）ことをめざした議論をおこなう。	
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>公開科目の教養教育リソースとしての可能性について、検討する。</li> <li>新カリキュラム完成年度（2020 年度）を見据えて、現時点での課題（見直しが必要な部分の有無等）を検討する。</li> </ul>	
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>公開科目の活用の可能性について各学部・分科会に意見・提言を求める。</li> <li>新カリキュラムの現時点での課題を各分科会で調査する。</li> </ul>	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		<ul style="list-style-type: none"> <li>公開科目の活用の可能性については、ILAC センター長がメンバーとして参加する市ヶ谷コミュニティ連携会議で公開科目の活用として進められているサティフィケート・プログラム「アーバンデザイン」として具体化され、その報告・説明を第 7 回 ILAC 運営委員会で行い、ILAC からこのプログラムに 2 科目を提供することが了承された。</li> <li>「ILAC 新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」のアンケートシートを執行部で作成し、第 7 回 ILAC 運営委員会で説明を行い、それに答える形で各分科会が検討を行い、各分科会から詳細な課題点・調査が提出された。第 9 回 ILAC 運営委員会で報告・情報共有を行った。</li> </ul>	
改善策	—		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
2	中期目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>少人数制授業科目におけるアクティブラーニングの促進や課題解決型授業の新規導入をはかる。</li> <li>学部専門教育カリキュラムと ILAC カリキュラムの有機的なつながりを学生に理解させるため、各学部の新入生ガイダンス等の改善を工夫する。</li> </ul>	
	年度目標	初年次教育科目におけるアクティブラーニングや課題解決型といった教授法授業について、ILAC 主催科目・学部専門科目の枠を超えて情報交換を行う。	
	達成指標	初年次教育におけるアクティブラーニングや課題解決型授業の導入・実施状況を調査し、その情報を共有する。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		0 群に設置された 100 番台選択基盤科目「キャリアデザイン入門」、「基礎ゼミ」および 1 群に設置された 100 番台基盤科目「文章論」を対象科目として、初年次教育におけるアクティブラーニングや課題解決型授業の導入・実施状況を執行部で調査し、報告書「初年次教育におけるアクティブラーニング（実施率と具体的方法・内容）および課題解決型授業 PBL（導入・実施状況）について」にまとめ、第 7 回 ILAC 運営委員会で配布、報告・説明し、その情報を共有した。	
改善策	—		
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
3	中期目標	2017 年度にスタートした、体系的（順次性）を重視した新カリキュラム（昨年度入学者から	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		適用)の成果は、本格的には完成年度(2020年度)をもって明らかになるが、それまでに暫定的な成果を調べるため、新たに幾つかの指標を導入する。	
	年度目標	新カリキュラム3年目の成果指標として、昨年度に試行した6学部成績サンプル調査を引き続き実施する。	
	達成指標	・ILAC科目年次別履修状況サンプル調査を実施する。 ・成果を調べるさらなる方法について検討する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	・新カリキュラム3年目の成果指標として、昨年度に試行した関連6学部におけるILAC科目年次別履修状況サンプル調査を実施し、6学部から4年生と2年生それぞれ、成績優秀者と一般の2種類で学部ごとに8名(総計48名)の成績表を抽出し、執行部において分析し、新カリキュラムの体系性(順次性)・課題点・改善策等についてまとめ、第9回ILAC運営委員会で「ILAC科目(旧市ヶ谷基礎科目)年次別履修状況サンプル調査の結果と分析」文書を配布・報告・説明・情報共有した。 ・新カリキュラムの成果を調べるさらなる方法について、「学生モニター制度」を活用した。事前アンケートを実施し、12月20日にモニタリングを実施し、またモニター学生の意見、並びにそこから見えた課題点・改善策を執行部が「2019年度学生モニター制度実施報告書(全学版)」および「教育開発支援機構2019年度学生モニター制度実施報告(ILAC検討資料)」文書にまとめ、第9回ILAC運営委員会で報告・説明・情報共有した。
		改善策	—
No	評価基準	教員・教員組織	
	中期目標	2017年度「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」の報告書を参考材料として、6学部協働で教養教育に責任をもつ体制の強化をめざす。	
	年度目標	・昨年度に執行部が提示した内規12条見直し案に対して各学部・分科会から出た意見を検討する。 ・センター長、副センター長の選出方法について見直しを検討する。	
	達成指標	・内規12条見直し案について、各学部・分科会から出た意見を集約し、論点整理を行う。 ・センター長、副センター長の選出方法見直しについて議論を開始する。	
	4 年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	・内規12条見直し案について、これまでに各学部・分科会から出た意見を集約し、論点整理を行い、執行部で「各分科会等意見集約一覧」を作成し、それに従って第3回、第4回、第5回ILAC運営委員会で議論を行った。同時に、第6回ILAC運営委員会で「内規第12条見直しについて(二次提案)」を提示し、各分科会、教授会に意見聴取を行い、それに従って、第8回ILAC運営委員会で承認された。 ・センター長、副センター長の選出方法見直しについて、第5回ILAC運営委員会で「センター長選出方法の一部改正について(提案)」を提示し、議論を開始した。第6回、第7回、第8回、第9回ILAC運営委員会で諮り、各分科会、教授会で検討を行い、第10回ILAC運営委員会で承認された。
		改善策	—
No	評価基準	教育研究等環境	
	中期目標	履修者数が教室定員を超過する大人数授業が少なくないILAC科目において、適正な授業環境の確保(履修者数の調整)に努める。	
	年度目標	2020年度実施に向けた、大規模人数授業のweb事前登録抽選制について、執行部事務局案をもとに運営委員会で細部を調整する。	
	達成指標	大規模人数授業のweb事前登録抽選制に関するシステムを構築し、運営委員会に提示・検討する。	
	年度末	教授会執行部による点検・評価	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	報告	自己評価	S
		理由	大規模人数授業の web 事前登録抽選制について、第 2 回 ILAC 運営委員会で「2020 年度以降 ILAC 科目教室割付指針について」を提案し、第 3 回、第 4 回、第 5 回、第 6 回 ILAC 運営委員会、および各分科会、教授会で議論・検討がなされた。そこでの意見を盛り込んだ最終案が第 7 回 ILAC 運営委員会で承認され、抽選制のシステムを構築した。2020 年度 4 月から大規模人数授業の web 事前登録抽選制が実施される。
		改善策	—
No	評価基準		社会連携・社会貢献
6	中期目標		自然科学センター（自然科学分科会教員が参加）ですでに実績がある、一般市民や児童への啓発活動「サイエンスコミュニケーション」や、社会連携の「窓口」的な意義を有しているゼロ群のキャリア教育関連科目群に加えて、他にも新たに、社会の「現場」体験・課題解決型科目をゼロ群に開設することをめざす。
	年度目標		教育開発支援機構のプランに基づき、ゼロ群に外部（企業や民間の市民活動団体等）と連携した課題解決型フィールドワーク科目を新規設置することをめざした準備を進める。
	達成指標		課題解決型フィールドワーク科目の内容と設置可能性について運営委員会・分科会で検討し、調査する。
	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S
年度末報告	理由	教育開発支援機構企画委員会において審議・検討され、学部長会議で開講が了承された課題解決型フィールドワーク forSDGs のタイプ B を ILAC 科目 0 群に設置することが第 3 回 ILAC 運営委員会で審議・承認された。募集が開始され、2019 年度は 2 科目が実施された（うち 1 科目は保健体育分科会教員による）。また、第 8 回 ILAC 運営委員会において、本年度採択された保健体育分科会委員長より実施状況の報告・情報共有した。	
	改善策	—	

## 【重点目標】

ILAC は、2020 年度に新カリキュラムの完成年度を迎えると同時に、過少受講者の授業に対する取扱いルールの適用が始まる。その前年にあたる 2019 年度は、新カリキュラムの現時点での課題の抽出、見直しの検討を開始する。そのために運営委員会・分科会での検討・調査を行う。

## 【年度目標達成状況総括】

2019 年度は、新カリキュラムの現時点での課題の抽出、見直しの検討のため、大きく 3 つの取り組みを行った。ひとつは、ILAC 関連 6 学部の学生から、計 48 名の学生を抽出し、成績別履修サンプリング調査を行い、「ILAC 科目（旧市ヶ谷基礎科目）年次別履修状況サンプル調査の結果と分析」としてまとめ、第 9 回 ILAC 運営委員会で、目的・方法・データ資料の内容・表、分析結果・評価と課題点を説明・報告した。2 つめは、教育開発支援機構 2019 年度学生モニター制度の活用であり、2019 年 12 月 20 日に実施した。執行部で作成した事前アンケートに参加学生 10 名全員にあらかじめ答えてもらい、それをクロス集計したうえで、モニタリングを行った。それを「2019 年度学生モニター制度実施報告書（全学版）」および「教育開発支援機構 2019 年度学生モニター制度実施報告（ILAC 検討資料）」にまとめ、第 9 回 ILAC 運営委員会で説明・報告した。3 つめは、「ILAC 新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」を各分科会に検討してもらい、その報告書を作成・提出していただき、これを第 9 回 ILAC 運営委員会で説明・報告してもらい、情報共有を行った。今後はこの 3 つの成果に従って、具体的な改善を行う予定である。

そのほか、教育課程・学習成果、教員・教員組織、教育研究等環境、社会貢献・社会連携に関する諸項目については、達成指標を満たすことができ、中期目標の達成に向けて必要な取り組みが進んでいると評価できる。

## 【2019 年度目標の達成状況に関する大学評価】

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2019 年度の重点目標の一つに「新カリキュラム完成年度(2020 年度)を見据えて、現時点での課題(見直しが必要な部分の有無等)を検討する」ことを挙げ、その検討のために ILAC 関連 6 学部の学生抽出による成績別履修サンプリング調査、教育開発支援機構 2019 年度学生モニター制度の活用によって「教育開発支援機構 2019 年度学生モニター制度実施報告(ILAC 検討資料)」をまとめ、各分科会の検討レポート「ILAC 新カリキュラムにおける現時点での課題・問題点について」をまとめて情報を共有し、課題点の解決という目標を継承して、「ILAC 新カリキュラム Reborn

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

プロジェクト」を発足させて具体的な改善の段取りを整えられたことは大きな成果であり、高く評価できる。

重点目標「2020年度実施に向けた、大規模人数授業のWeb事前登録抽選制について、執行部事務局案をもとに運営委員会で細部を調整する」について、議論と検討を重ね、一般の講義科目において過多(大規模)受講者授業に対してその適正化を図るため、委員会の承認に基づき、2020年4月から事前抽選制を導入して一授業あたりの履修者数の適正化を担保できるようになったことは大きな成果であり、高く評価できる。

#### IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関する事】
1	中期目標	2017年度「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」の報告書を参考材料とした議題を運営委員会において設け、各学部・分科会独自のアイデア・提案も募りながら、市ヶ谷地区における教養教育の幅を広げる（リソースをさらに豊かにする）ことをめざした議論をおこなう。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>学部・ILACが共同して、市ヶ谷地区の共通の教養教育の在り方の可能性について、検討する。</li> <li>新カリキュラム完成年度（2020年度）を迎えて、各分科会や学生モニター制度活用のモニタリングにおいて2019年度にあがってきた課題を検討する。</li> </ul>
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>ILAC長がメンバーとして参加している市ヶ谷コミュニティ連携会議において、市ヶ谷地区の共通の教養教育のプログラムの可能性について検討する。</li> <li>新カリキュラムにおける課題のひとつである卒業所要単位の配置・構成について検討する。</li> </ul>
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関する事】
2	中期目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>少人数制授業科目におけるアクティブラーニングの促進や課題解決型授業の新規導入をはかる。</li> <li>学部専門教育カリキュラムとILACカリキュラムの有機的なつながりを学生に理解させるため、各学部の新入生ガイダンス等の改善を工夫する。</li> </ul>
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>学部の新入生ガイダンスでILACカリキュラムについて説明する場・機会と資料提供の2021年度の実施を目指す。</li> <li>カリキュラムマップ・ツリーの視覚的体系性・順次性可視化の向上と一覧性の改善に向けて検討を開始する。</li> </ul>
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>学部の新入生ガイダンスでILACカリキュラムについて説明するための資料を制作する。</li> <li>カリキュラムマップ・ツリーのリニューアルに着手する。</li> </ul>
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関する事】
3	中期目標	2017年度にスタートした、体系性（順次性）を重視した新カリキュラム（昨年度入学者から適用）の成果は、本格的には完成年度（2020年度）をもって明らかになるが、それまでに暫定的な成果を調べるため、新たに幾つかの指標を導入する。
	年度目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>新カリキュラム完成年度の成果指標として、「学生モニター制度」を今年度も実施し、学習成果測定に関するモニターを行う。</li> <li>「新カリキュラム Reborn プロジェクト」にもとづきカリキュラムの体系性・順次性に関する課題改善を検討する。</li> </ul>
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>事前アンケートを伴う「学生モニター制度」を活用し、学習成果測定に関する学生モニタリングを実施する。</li> <li>カリキュラム構造（階層のありかた）の検討・議論を開始する。</li> </ul>
No	評価基準	教員・教員組織
4	中期目標	2017年度「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」の報告書を参考材料として、6学部協働で教養教育に責任をもつ体制の強化をめざす。
	年度目標	ILAC関連6学部協働で教養教育にコミットする方法について議論を開始する。
	達成指標	関連6学部教授会主任と分科会委員長が教養教育について共同で意見交換のできる場の創出について検討する。
No	評価基準	教育研究等環境

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

5	中期目標	履修者数が教室定員を超過する大人数授業が少なくない ILAC 科目において、適正な授業環境の確保（履修者数の調整）に努める。
	年度目標	2020 年度から実施される大規模人数授業の web 事前登録抽選制について、適切な実施過程、周知過程、抽選制実施後の改善状況の把握、問題点の把握を行う。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 抽選制の実施過程・周知過程を振り返る。</li> <li>・ 抽選制となった授業の改善状況の調査を開始し、検討する。</li> <li>・ 課題点の調査を開始し、検討する。</li> </ul>
No	評価基準	社会連携・社会貢献
6	中期目標	自然科学センター（自然科学分科会教員が参加）ですでに実績がある、一般市民や児童への啓発活動「サイエンスコミュニケーション」や、社会連携の「窓口」的な意義を有しているゼロ群のキャリア教育関連科目群に加えて、他にも新たに、社会の「現場」体験・課題解決型科目をゼロ群に開設することをめざす。
	年度目標	イオン銀行の寄付講義である「リベラルアーツ特別講座（金融リテラシー）」が 0 群に置かれ、2020 年度から開講されるが、実施状況、履修者の反応、成果、課題を検証する。
	達成指標	「リベラルアーツ特別講座（金融リテラシー）」実施の振り返りに伴い、その実施状況、成果や課題の調査を行う。
<p><b>【重点目標】</b></p> <p>ILAC は、2020 年度に新カリキュラムの完成年度を迎える。新カリキュラムの課題点の抽出を行うために ILAC では 2019 年度に①「各分科会による課題点と改善策」の提言、②「年次別サンプリング調査」、③学生モニター制度によるモニタリングを行った。リニューアル、リスタートに向けて、ここから浮かび上がる新カリキュラムの課題解決のための議論、検討を行う。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b></p> <p>左記①②③をもとに作成した「新カリキュラム Reborn プロジェクト」に沿って、卒業所要単位のありかたの見直し、カリキュラム構造の再検討、カリキュラムマップ・ツリーのリニューアルに着手する。</p>		

#### 【2020 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2020 年度に新カリキュラムの完成年度を迎えるにあたり、各分科会や学生モニター制度活用によって教育課程・教育内容の課題、および学習成果の測定に関するモニタリング調査の実施、また「新カリキュラム Reborn プロジェクト」によりカリキュラムの体系的・順次性に関する課題改善の検討を重点目標としており、適切である。

中期目標として、履修者数が教室定員を超過する大人数授業の履修者数調整のために、2020 年度から Web 事前登録抽選制を導入することになっているが、その適切な実施過程、周知過程、抽選制実施後の改善状況の把握・問題点の把握を年度目標としており、これは実施後の課題を見きわめるためにも欠かせないものであり、適切である。また、2017 年度にまとめられた「市ヶ谷地区教養教育の在り方検討プロジェクト」の報告書を参考材料として、各学部・分科会独自のアイデア・提言を募り、市ヶ谷地区における教養教育の幅を広げることを目指した議論を行うことについては、市ヶ谷地区の教養教育の根幹にかかわるもので、常に全学的に門戸を開いてフレキシブルな意見を募ることは重要であることから、長期的な視野に立って慎重な検討と議論を期待したい。

#### 小金井リベラルアーツセンター

#### I 2019 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

##### 【2019 年度大学評価結果総評】（参考）

小金井リベラルアーツセンターでは、引き続き理系学部に適格的な内部質保証の工夫が求められる。また、2019 年度に語学教育のカリキュラム改革が実施されるが、今後、その成果の検証が必要になるだろう。以前より課題とされてきた情報科学部の KLAC への参加については、懸案の解決に向けてゆっくりでも着実に歩を進めることを期待したい。2019 年度の重点目標である「理科学科・実験科目における専任教員・兼任教員の適正配置、運営体制の確立」についても、学部と協力しつつ多角的な視点から検討することが望まれる。

##### 【2019 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

内部質保証体制については、生命科学部教授会主任を委員長とする自己点検委員会を組織し、理系専門教育と分科会の守備範囲を考慮し分担して自己点検を行った。2019年度に行われた語学教育のカリキュラム改革では、多くの学生が履修可能な曜日・時限を設定し、履修の機会をできるだけ均等に与えることとした。情報科学部については、2020年度よりKLAC諸語科目の履修を開始した。

2017-2019年度に理工・生命両学部で新規採用した3名の専任教員を、両学部の協力の下、物理学基礎Ⅰ・Ⅱと科学実験Ⅰ（物理学実験）、化学基礎Ⅰ・Ⅱと科学実験Ⅱ（化学実験）に配置し、座学・実験科目ともに専任教員が理系科目を長期、安定的に運営できる体制を確立することができた。

### 【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

小金井リベラルアーツセンターでは、2019年度の大学評価結果総評で理系学部に適切的な内部質保証の工夫が求められたことに対し、生命科学部教授会主任を委員長とする自己点検委員会を組織し、自己点検を行っており、適切である。語学教育のカリキュラム改革については、多くの学生の履修可能な曜日・時限を設定して履修機会の均等化に取り組んでおり、適切である。情報科学部のKLACへの参加については、2020年度よりKLAC諸語科目の履修を開始できるようになり、適切である。

2019年度の重点目標である「理系科目・実験科目における専任教員・兼任教員の適正配置、運営体制の確立」については、2017～2019年度に理工・生命科学両学部で新規採用した3名の専任教員を物理学基礎Ⅰ・Ⅱと科学実験Ⅰ（物理学実験）、化学基礎Ⅰ・Ⅱと科学実験Ⅱ（科学実験）に配置し、座学・実験科目ともに専任教員が理系科目を長期に安定的に運営できる体制が確立され、大いに評価できる。

当該年度に関しては大学評価委員会が改善を求めた事項のすべてに対応されており、高く評価できるが、今後も継続して懸案の解決に向けて取り組まれることを期待したい。

## II 自己点検・評価

### 1 教育課程・学習成果

#### 【2020年5月時点の点検・評価】

##### (1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

S  A B

※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

英語科目群、教養科目群（人文・社会・自然科学系、スポーツ健康科学、選択語学系、リテラシー系）、理系教養科目群（数学系、理科系）からなる幅広い教養科目を提供する。それぞれの履修状況をモニターすることで履修の機会をできるだけ均等に与えることを目指している。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・理工学部生のための履修の手引き（冊子体・Web版）
- ・生命科学部生のための履修の手引き（冊子体・Web版）
- ・KLAC運営委員会資料・議事録

②初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。

S  A B

※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

「科学実験Ⅰ（物理学）」、「科学実験Ⅱ（化学）」、「科学実験Ⅲ（生物学）」により、実験レポートの書き方、プレゼンテーション方法の修得をさせている。科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ開講時の総合ガイダンスにおいて、受講者の高校での理科履修科目・実験経験のアンケートを実施し、アンケート結果を利用することにより理科の習熟度に応じたきめ細やかな実験指導を行っている。また、受講者に名札装着を義務づけることで、実験グループ内で活発にコミュニケーションをとれるようにさせており、教員側も受講者をすぐ判別できるため、実験指導、評価をより効果的に実施できている。

数学科目では、高等学校との接続にも配慮した共通テキストを採用している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。



リテラシー科目では、高等学校までの基本的なパソコン操作の習熟度を調査し、それに基づいたテキストの作成および TA によるサポートを実施している。

**【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・該当科目のシラバス (Web 版)
- ・新入生ガイダンスでの資料 (冊子体・Web 版)
- ・理工学部生のための履修の手引き (冊子体・Web 版)
- ・生命科学部生のための履修の手引き (冊子体・Web 版)
- ・書籍『コア講義 微分積分』、『コア講義 線形代数』(裳華房)

③学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S  A B

※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

「キャリアデザイン」、「科学技術史」、「先端技術・社会論」、「技術者倫理」、「情報倫理」、「文章作法」などの授業を開講し、キャリアデザインを修得させるとともに、技術と実社会との繋がりを意識させている。

**【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・該当科目のシラバス
- ・ガイダンスでの資料

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S  A B

**【履修指導の体制および方法】** ※箇条書きで記入。

- ・履修の手引きにおいて、科目区分ごとの目標を明示している。
- ・英語および諸外国語科目については、入学時の語学ガイダンスは、新型コロナウイルス問題対応により、WEB 上でおこなった。
- ・英語科目では 2019 年度は、冊子「英語上達への道」を作成し配布した。2020 年度は、新型コロナウイルス問題への対応のため、Web 版を作成予定である。
- ・2019 年度は、ガイダンス時に担当教員と事務部の連携により教養科目履修について指導がおこなわれた。2020 年度は、新型コロナウイルス問題の影響により、Web 上での情報公開に留まった。
- ・プレースメントテストの結果に基づき、一部の理系教養科目のクラス分けをおこない、リメディアル科目「入門数学」「入門物理学」を運用している。

**【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・理工学部生のための履修の手引き (冊子体・Web 版)
- ・生命科学部生のための履修の手引き (冊子体・Web 版)
- ・新入生ガイダンスでの資料 (冊子体・Web 版)
- ・「英語上達への道」(冊子体)
- ・「選択語学ガイダンス」実施案内 (Web 版)
- ・自然科学系科目履修指導用 PPT ファイル (Web 版)

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S  A B

※取り組み概要を記入。

英語科目、諸外国語科目および理系教養・実験科目ではレポートの添削指導を行うなど、各科目で具体的な学習指導をしている。人文・社会系科目では適宜作文を課し、意見交換の機会を設けるなど、学生の言語表現力を高めるよう指導している。また 他の分野に興味のある学生に対して個別指導を行っている。また、海外留学を希望する学生、語学検定の資格を取得したい学生に対して個別相談と学習指導を行っている。理系教養科目では TA、ラーニング・サポーターも、学習指導全般に活用している。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

リテラシー科目では、レポート執筆の基本ルール、効率的な情報処理手法、効果的なプレゼンテーションスキルを修得できるような課題を設定し、その解決手順を詳しく解説している。

2020年度は、新型コロナウイルス問題への対応のため、授業のオンライン化を行っており、これらのことがオンライン授業でも実現できるか、その可能性を探っている。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

新たに導入されたKLAC枠のラーニング・サポーター制度の活用を開始した。理科分科会では、秋学期、生命科学部の物理系基礎科目（教養科目と一部の学部共通科目を含む）を対象とするラーニング・サポーター1名を採用した。英語分科会では、秋学期、全英語科目を対象とするラーニング・サポーター3名を採用し、週3日のペースでその活用を開始した。

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・該当科目のシラバス（Web版）
- ・（化学実験）「レポートの書き方」「レポートチェック事項」
- ・ラーニング・サポーター相談時間記録

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。

S  A B

※取り組み概要を記入。

科学実験（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）では、毎回レポートを課し、予習・復習を盛り込むことにより、学習時間を確保している。また、英語では多読を推奨し読書の記録を提出させて総語数による学習動機向上を図っている。リテラシー科目では、課題の提示と、自己学習（復習用）の教材や資料提供で学習時間増加を促進している。また、パソコンの基本ソフト（Word, Excel, PowerPoint等）の活用スキルの向上を目的として、2020年度からラーニング・サポーター制度を実施している。

2020年度は、新型コロナウイルス問題への対応のため、授業のオンライン化を行っており、これらのことがオンライン授業でも実現できるか、その可能性を探っている。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・該当科目のシラバス（Web版）
- ・科学実験Ⅱの「レポートの書き方」「レポートチェック事項」
- ・科学実験（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）ガイダンス資料

④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。

S  A B

**【具体的な科目名および授業形態・内容等】** ※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。

・短期留学制度（SA）プログラムの単位認定を、教養科目の「科学技術コミュニケーション演習」としておこなっているが、2020年度は、新型コロナウイルス問題により、中止された。

・英語教育改善プロジェクトにおいて、英語教育の在り方を継続して話し合っている。

・諸外国語の一部の授業では実験的にアプリを使用して発音指導と作文添削などを行っている。

・科学実験では、終了後に話す能力と聞く能力を育成する目的のためにグループディスカッションをおこない、座学重視ではない授業形態の展開に取り組んでいる。

・リテラシー科目では、演習時間の確保、自ら設定した調査課題の発表及び教員・TAとの意見交換など、アクティブラーニングの導入を心掛けている。

・スポーツ健康科学実習では「体力テスト」を実施し、学期末にフィードバックすることで自身の体力レベルや体組成を確認し、健康の維持・増進を促す。また、「個人カード」を用いることで、毎回の授業テーマを理解するとともに、その成果を収集化している。

・2020年度は新型コロナウイルス問題対応のため、オンライン授業が行われている。

そのために各分科会では、担当兼任教員とも連絡を密に取り、オンライン授業についてのワークショップの開催、評価基準の設定、必要な機材などについて、担当教員の要望をとりまとめている。

**【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・発音指導・作文添削アプリ
- ・体力テスト実施要領、集計結果
- ・英語教育改善プロジェクト資料・議事録

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※どのような配慮が行われているかを記入。</p> <p>講義科目については教室のキャパシティや学習効果測定を鑑みて、必要に応じて受講者制限を行うなどしている。受講者制限については担当教員だけでなく、科目所属の分科会が提案し KLAC 運営委員会でその適否を検討するなどして、慎重に行うようにしている。語学科目については必修科目を含めて定員を設けており、内容・レベルに適した受講者数を維持するよう、必要に応じてクラス増もして対応している。実験・実習科目については実験器具や実施時間に不足が起こらないよう、さらにスポーツ実習科目は安全管理の観点から適正人数を保つようなクラス割（時間割設定）を行っている。</p> <p>2020年度は新型コロナウイルス問題への対応として、オンライン授業が行われているが、受講者登録抽選科目は、抽選を行い1授業あたりの学生数の配慮は維持した。今後はさらに、「3密」を避けるために、教室の大きさや学生数について管理の徹底を図る。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 該当せず</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>理工学部・生命科学部共通 教養科目・教職科目 時間割 (Web版)</li> <li>理工学部生のための履修の手引き (冊子体・Web版)</li> <li>生命科学部生のための履修の手引き (冊子体・Web版)</li> </ul>	
1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p><b>【確認体制および方法】</b> ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生申告による成績評価の調査申請が制度化されている。</li> </ul> <p>以下の点について、オンライン授業でどこまで実施が可能か、判断しなければならない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>英語科目では試験答案の学生への返却を実施している。</li> <li>数学系科目では、複数教員が担当する科目において成績の比率調整など成績基準を打合せている。</li> <li>英語科目ではTOEICによる習熟度別クラス編成を行うが、成績評価において公平を期するため、クラスのレベルを考慮し習熟度上位クラスで成績を有利に評価している。</li> <li>リテラシー科目では、小テスト、演習・レポート課題に基づき、定量的に評価している。</li> <li>実験科目においては成績会議を行い、適切な成績評価、単位認定を行っている。</li> </ul> <p>2020年度は新型コロナウイルス問題への対応として、オンライン授業での評価基準について3学部の成績評価のためのガイドラインを踏まえ KLAC 内で議論し、適切な評価を行う予定である。</p>	
<p><b>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 該当せず</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>理工学部生のための履修の手引き (冊子体・Web版)</li> <li>生命科学部生のための履修の手引き (冊子体・Web版)</li> <li>実験科目成績判定会議議事録</li> </ul>	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①成績分布の状況を把握していますか。	はい <input checked="" type="checkbox"/> いいえ
<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>英語分科会では前年度に作成した英語成績分布のガイドラインを作成し、兼任講師に展開している。</li> <li>「科学実験Ⅱ」において、全クラスの成績分布の年次推移を集計、担当教員間で共有している。</li> <li>リテラシー科目ではGP集計結果や出欠情報システムにより試験放棄の実態を把握している。</li> <li>数学科目では、統一試験を採用している学科の担当者を中心に成績分布を共有している。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「科学実験Ⅱ」成績分布の推移</li> </ul>	
②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※取り組みの概要を記入。

英語教育においては TOEIC の点数を、諸外国語教育においては検定試験の結果を、学習成果を測定する指標の一つとしている。数学においては、統一試験を行い指標の一つとしている。

KLAC 自然科学分科会を数学分科会、理学分科会に分け、数学教育及び理科教育における学習成果の把握等に分野の特性に応じて対応できる体制とした。

【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・理工学部生のための履修の手引き（冊子体・Web 版）
- ・生命科学部生のための履修の手引き（冊子体・Web 版）
- ・小金井リベラルアーツセンター規程

③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。

S  A B

※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。

授業改善アンケートの記述や、卒業生アンケート等各種アンケートの関連記述等により学習成果を把握・評価するように努めている。また、実技科目では授業内に達成度を評価することで、学習成果を把握している。英語科目では学生が継続的に受験している TOEIC の成績集計・集積を行い学習成果の把握を行っている。実験科目では、実験作業や実験ノートの確認、レポートに関する試問等により実験内容の理解度・到達度を把握・評価するようにしている。リテラシー科目では、学生が行ったプレゼンテーションや演習課題に対し、教員が試問することにより、理解度を把握している。

【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・TOEIC 実施結果・集計結果
- ・KLAC 運営委員会資料・議事録

1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。

①学習成果を組織的・定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S  A B

※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

英語科目では、入学時、1 年生 12 月及び 2 年生 12 月に TOEIC を行い、さらに、3 年生、4 年生になってからも希望者に対して受験を促し、学習成果の把握に努めている。さらに、TOEIC テストの結果に著しい成績上昇がある場合に、成績のボーナス制度が設定されている。2020 年度は、新型コロナウイルス問題への対応として、入学時の TOEIC は、オンライン試験で実施した。12 月の TOEIC の実施形態については、オンライン実施するかどうかは検討の予定である。

また、理系教養科目では、プレースメントテストと入学後の数学・物理の成績についてその推移を入試経路別に調査している。

【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・TOEIC 実施案内
- ・理工学部生のための履修の手引き（冊子体・Web 版）
- ・生命科学部生のための履修の手引き（冊子体・Web 版）

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。

S  A B

【利用方法】※箇条書きで記入。

- ・授業改善アンケートの KLAC 担当科目の自由記述（KLAC からの申請で入手可能）について、必要に応じて理工学部・生命科学部の執行部に開示する仕組みになっている。
- ・理工学部では回答した学生の GPA 値と対比できる形で各教員にフィードバックしている。

【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

該当せず

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

## 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・KLAC 運営委員会資料・議事録

## (2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし。	

## (3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについて、授業設置後約10年を過ぎ、設備・実験機器の経年劣化がみられつつある。一方、履修指導の成果で、近年、多くの学科で科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの履修率が増加している。これはよい傾向であるが、入学者超過がおこった場合に履修者数が実験室の収容人数を超えると同時に、TAや実験機器等が不足する恐れがある。これに対し、科学実験Ⅲでは2019年度に顕微鏡を7台購入し、保有台数を43台とした。この措置により、人数が多いクラスでもほぼ1人1台顕微鏡が使用可能になった。また、科学実験Ⅱでも経年劣化の著しい実験機器に頼る一部の実験テーマを見直し、2020年度から一部テーマについては変更して実施する予定である。収容人数を増やすため、実習スペースを拡大することは現実的には困難であるため、引き続き学部と協力するなどして設備・機器の更新・充実を進める必要がある。</p> <p>スポーツ健康科学講義・実習では、2019年に大幅なカリキュラム変更を実施したが、身体運動に関わる実験実習の設備・実験機器が全く準備できていない。各学部と協力して、実験スペース、機器、設備、サポートスタッフの手配を進める必要がある。</p> <p>スポーツ健康科学実習では、2019年度からの時間割変更に伴い、1限目の緑町グラウンドの利用が困難になっている。あわせて、各学期で緑町グラウンドを利用できる回数が制限されている。このことは、今後新型コロナウイルス問題への対応として感染リスクを低減するために屋外施設を優先的に利用することがきわめて困難となり深刻な問題である。関連部局と調整が必要である。</p>	

## 【この基準の大学評価】

小金井リベラルアーツセンターでは、英語科目群、教養科目群、理系教養科目群からなる、幅広い教養を修得できるカリキュラム編成となっており、評価できる。履修状況をモニタリングして履修機会の均等に配慮しており、適切である。高校での理科履修科目・実験経験のアンケートを実施して習熟度に応じたきめ細かな実験指導を行っており、初年次教育・高大接続に配慮している。技術と社会との関係を意識させる諸科目が配置されており、キャリア教育は適切に行われている。

英語および諸外国語科目では担当教員と事務部の連携、自然科学科目ではプレースメントテストに基づくクラス編成が行われており、履修指導は適切である。英語科目、諸外国語科目、理系教養・実験科目ではレポート添削によるきめ細かな学習指導が行われており、評価できる。実験系科目ではレポートを課すことにより学習時間が確保されており、英語科目では読書記録を提出させ学習動機の向上を図っており、評価できる。効果的な授業形態の導入事例として、諸外国語の一部授業でアプリを利用した発音指導や作文添削などの実験的な取り組みが行われている。語学科目や実験・実習科目で受講者数を適正規模に制限し、講義科目でも必要に応じて受講者数を制限するなどの取り組みが行われており、1授業あたりの学生数に配慮している。

成績評価の調査申請の制度化、英語科目で試験答案の返却、数学系の複数教員担当科目で成績比率の調整、リテラシー科目で定量的な基準の導入、実験科目で判定会議での成績評価を行っており、成績評価と単位認定は適切に行われている。英語科目で成績分布の作成、「科学実験Ⅱ」で成績分布の年次推移の集計、リテラシー科目で試験放棄の実態把握、数学系の複数教員担当科目での成績分布の共有が行われ、成績分布の状況を把握している。語学教育では外部検定試験の利用、数学科目では統一試験を行い、学習成果を測定している。英語科目でTOEICスコアの追跡調査、理系教養科目でプレースメントテストと入学後の数学・物理の成績の追跡調査により、学習成果の組織的・定期的検証を行っている。

授業改善アンケートの結果を理工学部・生命科学部の執行部に開示する仕組みが整備されており、評価できる。

## 2 教員・教員組織

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

## 【2020年5月時点の点検・評価】

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部（学科）等内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S **A** B

## 【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・教員による授業公開・相互参観の利用。
- ・「科学実験」においてFDアンケートに加えて独自アンケートを実施する。
- ・「科学実験」における履修者数推移調査を行う。

## 【2019年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・授業相互参観の実施（2019年6～7月、2019年11月～2020年1月）
- ・FDアンケートの実施（2019年6～7月、2020年1～2月）
- ・科学実験における独自アンケート調査
- ・科学実験における履修者数推移調査

## 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・教員による授業相互参観実施状況報告書
- ・公開科目一覧表（自然科学）
- ・全学モニター制度実施報告書
- ・科学実験独自アンケート
- ・科学実験履修者数推移集計

## (2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし。	

## (3) 問題点

内容	点検・評価項目
・2020年度は新型コロナウイルス問題への対応として、オンライン授業を行っている。KLACは、幅広い科目の担当教員がいる。この多様性を生かすどのようなオンライン授業が実施できるか、問題の共有とその解決策の検討を行う必要がある。	

## 【この基準の大学評価】

小金井リベラルアーツセンターにおけるFD活動は、教員による授業公開と相互授業参観が行われているほか、「科学実験」における独自アンケートや履修者数推移調査を実施されており、適切である。課題として2020年度の新型コロナウイルス対応としてKLACの幅広い科目の担当教員をいかしてどのようなオンライン授業が実施できるかについてはその問題の共有と解決策につて引き続き検討願いたい。

## III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	内部質保証							
1	中期目標	小金井教養教育に合った内部質保証体制を整える。							
	年度目標	昨年度同様に、運営委員会とは別に自己点検委員会を開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検状況を検討する。							
	達成指標	自己点検委員会の開催。							
	年度末報告	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">執行部による点検・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>運営委員会とは別に自己点検委員会を3回開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら、自己点検評価を行った。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>—</td> </tr> </tbody> </table>	執行部による点検・評価		自己評価	A	理由	運営委員会とは別に自己点検委員会を3回開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら、自己点検評価を行った。	改善策
執行部による点検・評価									
自己評価	A								
理由	運営委員会とは別に自己点検委員会を3回開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら、自己点検評価を行った。								
改善策	—								
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】							

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2	中期目標	学生の多様な価値観を育成するための教養教育の再検討と改善を行う。	
	年度目標	小金井地区における留学生のための日本語教育再開に継続して取り組む。	
	達成指標	引き続き小金井日本語教育の課題解決に向けた委員会を開催する。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		2019年6月に常務理事会にて認められた内容に基づき、2020年度より小金井キャンパスにおいて日本語教育プログラムを開講することにした。7月に人事委員会が立ち上がり、10月に日本語科目を担当する任期付き教員を採用した。本プログラムの開講については「(小金井)日本語教育の課題解決に向けたプロジェクト」が検討した。開設に伴う運用(カリキュラム、時間割など)について定期的に「日本語教育の課題解決に向けたプロジェクト」と小金井事務部が打ち合わせした。	
改善策	—		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
3	中期目標	学生の多様な価値観を育成するための教養教育の再検討と改善を行う。	
	年度目標	教養教育充実のためにラーニングサポーター制度を活用する。	
	達成指標	具体的な取り組み内容・時期等を検討し実行する。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		理科分科会では、秋学期、生命科学部の物理系基礎科目(教養科目と一部の学部共通科目を含む)を対象とするラーニングサポーター1名を採用し、その活用を開始した。英語分科会では、秋学期、全英語科目を対象とするラーニングサポーター3名を採用し、週3日のペースでその活用を開始した。	
改善策	—		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
4	中期目標	教員による相互チェック体制の充実を図る。	
	年度目標	継続して授業相互参観の充実を図る。	
	達成指標	カリキュラム改訂科目を含めた授業相互参観の実施。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	B
理由		理工・生命の両学部で昨年度同様に約130科目の教養系科目を公開し、理工学部2件、生命科学部9件の授業参観があった。	
改善策	カリキュラム改訂科目については、年次変化を考慮しながら引き続き授業相互参観を行うようにする。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
5	中期目標	教育の効果の測定のため、継続して成績データの収集と分析を行う。	
	年度目標	前年度に引き続き、期末試験を統一試験として行っている4科目(24クラス)の素点データの度数分布表を作成する。 電気電子工学科・応用情報工学科において、秋学期開講科目が必修化されたことの影響を把握するため、2学科についてはより正確な検討を行う。	
	達成指標	十分なデータが得られた科目の数を指標とする。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
自己評価		A	
理由		専任教員2名により試験問題を作成し、4科目24クラスで統一期末試験を行った。試験素点の度数分布データ(2019年度入学者限定)を23クラスについて収集し、統計処理を行って理解度の検討を行った。結果を、担当教員にもフィードバックした。	
改善策	新1年生に限定したデータ収集を継続し、経年変化の傾向および必修化の影響を注視観察する。		
No	評価基準	教員・教員組織	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

6	中期目標	学部と協調し適正な教員採用・配置を進める。
	年度目標	理科学目・実験科目における専任教員・兼任教員の適正配置、運営体制の確立。
	達成指標	2018年度、2019年度に新規採用した教員を含めた適性配置の検討。
	年度末報告	<p>教授会執行部による点検・評価</p> <p>自己評価 A</p> <p>理由 2018年度に新規採用した生命科学部配属の物理担当教員を主に生命科学部対象の物理学基礎Ⅰ・Ⅱ、科学実験Ⅰ（物理学実験）に配置することにした。このことにより、物理系科目については座学・実験科目ともに理工学部と生命科学部の対象クラスを各々1名の専任教員が責任をもって運営する体制を確立することができた。また、2019年度採用した化学担当教員を化学基礎Ⅰ・Ⅱ、科学実験Ⅱ（化学実験）に配置し、座学・実験科目ともに専任教員が化学系科目を長期、安定的に運営できる体制を確立することができた。</p> <p>改善策 ー</p>
No	評価基準	教育研究等環境
7	中期目標	情報科学部の KLAC 参加のプロセスを検討する。
	年度目標	カリキュラム上運用可能な諸語科目について、2020年度からの情報科学部と KLAC のコード共有を検討する。
	達成指標	3学部の授業時間割を総合して、適切な曜日に科目を配置できるよう検討する。
	年度末報告	<p>教授会執行部による点検・評価</p> <p>自己評価 S</p> <p>理由 2020年度より、KLAC の諸語科目について、3学部の授業時間割を総合して、適切な曜日に科目を配置できるよう検討し、情報科学部生が受講できることとなった。</p> <p>改善策 ー</p>
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	小金井市・教育委員会・総合型スポーツクラブと連携したスポーツ交流事業について、新たな企画、実施体制及び広報体制について検討する。
	年度目標	地域とのスポーツ交流事業として、卓球大会、野球教室、陸上教室を継続することで小金井地域との交流をはかる。さらに、新たな事業の企画を検討する。
	達成指標	年度目標に記載した、スポーツ交流事業（卓球大会、野球教室、陸上教室）の実施。新たな事業企画の検討。
	年度末報告	<p>教授会執行部による点検・評価</p> <p>自己評価 A</p> <p>理由 年度目標に記載した卓球大会、陸上教室を円滑に実施した。野球教室は荒天のため中止としたが、実施体制は万全であり、自己評価を A とした。新たな交流事業の企画については小金井市他、関係団体と検討を継続している。</p> <p>改善策 スポーツ交流事業の継続と新たな事業の企画を実現するにあたって、予算と実施場所の問題がある。特に実施場所については、緑町グラウンドの休日及び平日夜間の利用を可能にすべく引き続き改善を要望する。</p>
<p><b>【重点目標】</b></p> <p>年度目標のうち、「理科学目・実験科目における専任教員・兼任教員の適正配置、運営体制の確立。」を最も重視する目標とする。教養教育に関係する教員として2018年度に物理分野、2019年度に化学分野の専任教員が採用されており、兼任講師構成の年次変化やカリキュラム改訂の年次進行も考慮しながら、理科学目・実験科目において専門教育科目との関連を配慮した教員の適性配置と運営体制を検討する。</p>		
<p><b>【年度目標達成状況総括】</b></p> <p>具体的な目標を設定した項目については、概ね年度目標を達成している。特に、ラーニングサポータ制度を本年度より利用して教養教育の更なる充実を図ったこと、諸語科目について情報科学部と KLAC のコード共有が実現したこと、など新しい目標を達成できたことは、教育や体制の質向上に寄与したと考えている。また、重点目標とした「理科学目・実験科目における専任教員・兼任教員の適正配置、運営体制の確立」については、2018年度、2019年度より加わった新任の専任教員について、理科学目・実験科目に責任をもって安定的に取り組めるように所属学部も考慮して科目配置を行った。年次変化に対応</p>		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。



して継続して取り組む必要がある。今後も、カリキュラムの年次変化などに対応し、新たな課題を話し合いながら継続して中期目標に取り組む。

#### 【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

小金井リベラルアーツセンターでは、具体的な目標を設定した項目については概ね達成しており、評価できる。ラーニング・サポーター制度を活用して教養教育のさらなる充実を図ったこと、諸語科目での情報科学部とKLACのコード共有が実現されたことなど、新しい目標を達成できたことは教育や体制の質向上に寄与するものであり、評価できる。

重点目標である「理科学科・実験科目における専任教員・兼任教員の適正配置、運営体制の確立」については、理科学科・実験科目に責任をもって安定的に取り組めるように、2018・2019年度より加わった新任の専任教員を所属学部を考慮して配置しており、評価できる。今後、年次変化に対応して継続的に取り組まれることを期待したい。

授業相互参観の充実を図ることという目標においては理工・生命の両学部で約130の教養系科目が公開されている中で授業参観の件数が9件であり目標の達成が不十分であると自己評価されている。改善点でも挙げられているとおり引き続き授業相互参観の充実を図ってもらいたい。地域とのスポーツ交流事業で利用されている緑町グラウンドの休日および平日夜間の利用についても引き続き検討願いたい。

また、カリキュラムの再編成に対応し、新たな課題を共有しながら継続して中期目標に取り組まれることを期待する。

#### IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	内部質保証
1	中期目標	小金井教養教育に合った内部質保証体制を整える。
	年度目標	昨年度同様に、運営委員会とは別に自己点検委員会を開催し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら自己点検状況を検討する。
	達成指標	自己点検委員会の開催。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標	学生の多様な価値観を育成するための教養教育の再検討と改善を行う。
	年度目標	2020年度から小金井地区における留学生の日本語教育が始まる。授業の質保証を目的に小金井キャンパスの関係各所と連携を図る。
	達成指標	小金井地区における日本語教育の実施状況について関係各所と情報共有を行う。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
	中期目標	学生の多様な価値観を育成するための教養教育の再検討と改善を行う。
	年度目標	教養教育充実のためにラーニング・サポーター制度を活用する。
	達成指標	新型コロナウイルス問題の対応なども考慮し、オンライン指導の実施状況の把握および情報共有する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	教員による相互チェック体制の充実を図る。
	年度目標	継続して授業相互参観の充実を図る。
	達成指標	新型コロナウイルス問題対応なども考慮し、オンラインによる授業相互参観の実施が可能か検討し、試行する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	教育の効果の測定のため、継続して成績データの収集と分析を行う。
	年度目標	前年度に引き続き、期末試験を統一試験として行っている4科目（24クラス）の素点データの度数分布表を作成する。電気電子工学科・応用情報工学科において、秋学期開講科目が必修化されたことの影響を把握するため、2学科についてはより正確な検討を行う。統一試験が実施できない場合には、代替措置を検討せずデータの収集も行わない。 前年度に引き続き英語力については入学年度4月と12月、および2年次秋にTOEICテストを行い、継続的に教育効果の測定を行う。
	達成指標	十分なデータが得られた科目の数を指標とする。 新型コロナウイルスの状況を考慮し、対面によらない実施法などを検討、実施し、継続した成績データの収集と分析を行う。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

No	評価基準	教員・教員組織
6	中期目標	学部と協調し適正な教員採用・配置を進める。
	年度目標	今後の教員採用に備え、理工学部・生命科学部執行部との連絡を密にする。
	達成指標	理工学部・生命科学部執行部との情報交換連絡会の開催。
No	評価基準	教育研究等環境
7	中期目標	情報科学部の KLAC 参加のプロセスを検討する。
	年度目標	2020 年度から情報科学部の学生が KLAC の諸語科目を履修することが可能となった。オンライン授業化のもとでの諸語教育の効果を測る。
	達成指標	情報科学部の学生の KLAC 諸語科目の履修状況を把握する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	小金井市・教育委員会・総合型スポーツクラブと連携したスポーツ交流事業について、新たな企画、実施体制及び広報体制について検討する。
	年度目標	新型コロナウイルスの影響を鑑みつつ、関係各所と連携の上、スポーツ交流事業の開催を模索する。あわせて地域スポーツイベントへの支援の継続も検討する。さらに、次年度に向けて新たな事業の企画を検討する。
	達成指標	新型コロナウイルス問題対応なども考慮しつつ、小金井地域におけるスポーツ交流事業の開催とイベント支援を行う。
<p><b>【重点目標】</b>          新型コロナウイルス問題を契機とした新たな教授法の検討など教員同士の連絡を密にし、小金井キャンパスにおける教養教育の円滑な運営・充実を図る。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b>          KLAC は、多様な科目があるため、それぞれの授業特性に応じ、オンデマンド・双方向などいわゆるオンライン授業の実施可能性を検証する。</p>		

### 【2020 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

小金井リベラルアーツセンターでは、評価基準の各項目について、年度目標は中期目標に即して適切かつ具体的に設定されている。中期目標「小金井教養教育に合った内部質保証体制を整える」については、市ヶ谷リベラルアーツセンターとは異なる、小金井リベラルアーツセンターならではの創意工夫が求められる。また、「学生の多様な価値観を育成するための教養教育の再検討と改善を行う」については、2020 年度から留学生のための日本語教育が始まることもあり、具体的な取り組みが期待される。さらに、「情報科学部の KLAC 参加のプロセスを検討する」については、2020 年度より情報科学部生が KLAC の諸語科目を履修できるようになったことを受けて、履修状況を把握するとともに、その成果について検討を続けられることを期待する。

新型コロナウイルス感染症を防止しつつ、小金井キャンパスにおける教養教育の円滑な運営・充実を図ることは喫緊の問題であり、可能な限り多角的な取り組みが行われることを期待したい。

### 【大学評価総評】

教育開発・学習支援センターでは、2020 年度より FD 推進センターおよび学習環境支援センターの統合によって発足したこともあり、安定的な運営の確立のために中長期の運営方針の検討を行い、また両センターから引き継いだ継続事業の点検のほか、これから新たに取り組むべき課題を洗い出し、全学的な教育開発・学習支援活動に取り組まれることを期待したい。特に、教育・学習支援をより効果的に機能させるためにも「学生による授業改善アンケート」の実施方法やそのフィードバックの方法についてもさらに検討され、教員の教育の質や学生の学びの質を向上させる仕組みの検討を引き続き期待したい。

市ヶ谷リベラルアーツセンターでは、2020 年度に新カリキュラムの完成年度を迎えるため、その円滑な運営とともに、体系的（順次性）を重視した新カリキュラムの課題の抽出や見直しの検討が重要な目標となってくる。そのために、「ILAC 新カリキュラム Reborn プロジェクト」が発足されているので、それが中核になりながらも市ヶ谷関連 6 学部や各分科会ともしっかりと連携し、専門教育とも密接にかかわるところでもあるので、さまざまな事業・活動のリニューアル・リスタートに向けて長期的な視野に立って慎重な検討をされることを期待したい。

小金井リベラルアーツセンターでは、引き続き理系学部に適格的な内部質保証の工夫が求められる。当面、理工学部・

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

生命科学部で連携し、理系専門教育と教養教育の関連を考慮しながら質保証問題について検討されることを期待したい。また、従来より懸案であった情報科学部の KLAC への参加については、2020 年度より諸語科目の履修が開始されたが、理系教養教育のあり方について引き続き検討されることを期待したい。2019 年度に自己評価が B 評価であった「継続して授業相互参観の充実を図る」という目標については、今年度末の改善報告に期待したい。

なお、新型コロナウイルス感染症を防止しながらの教育活動は全学的な課題であるが、オンライン授業における問題点の洗い出しや学生個々のケア、さらに対面型授業における問題点等を含めて、教育開発支援機構および 3 センターで力を合わせ、解決に取り組まれることを期待したい。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。